23-17

東京帝國大學哲學

真理神論

鳥尾得庵居士著

明治二十年八月出版

自卷之一至卷之三合一冊

No 5337

حق

حق: اللہ

昭和二十年七月

識者諸公御高覧

神のありやなしやといふ論の、世にかちたく聞ゆるは、論はてはえあらぬことありてなるべし、さるは世に神として崇むるか中にもいとあやしきが多くて、まことにさる神はあらぎて、人のつくりまうけたるもあり、又世のたすけとなれる物の功を稱へて、神となつけたるもありて、名こそ神とはいへ、その本質は種々なるを、そのけちめを深くおもはて、唯神といふ名ゆまそはされて、真の理をさとりえぬ人の多かるは、いと歎はしきことにしあれは、心あらん人は、もたあるへきにもあらねは、こまやかに論らひて、世のまそひをとくへきことゆ

なむ」抑天地萬物を、七日のほどにつくりたりとかいふ事は、いみしき誤なるは、いふも更なれど、おほよそ人のならひとして、眼に見えぬ區域のことには、さるべき事あしと、おのが智をもて、おしはかり定めて、終に神はあらしとさへ論ひ、あるはおのが智の淺きより、みつからおもひはかりてなしへき事をさへ、唯神にまかせて、何事も神のまに〳〵とおもふもあり、こはともに、おもひゑかめたるものにて、一はおのが智にほこりて、神のうへを論ひ、一はおのが智の乏しきより、みつからのうへをわすれたるなり、おのれとしろ神道の真の理を說

きあかして、世のまとひをとかんとて、をちあき身をしも忘れていたつき、あるは東西の國々をめくりて、人を教へみちひき、あるは學識ある人たちにまじらひて、真の理をとひ明らめ、なとしてあるにつけて、近き頃、鳥尾子爵のもとをとひて、そのかたの事ともを、とひもし語りもしつるに、無神論をあらはせりとて、見せられしかは、まつその名のいみしきにおとろきて、いかなる事をかしるされたらん、と讀み見れは、その論の高尚なるは更なり、誰しの人にも、辨へやすくしるされし心しらひの深きに、いたくかまけぬ、まして無神といふは、かの七

目のほとに、天地萬物を造れりといふたくひの神はなし、といふ論ましあれは、さるもちの說に、まとはされかちなる今の世の人のためまは、いとよき教ありけりと、うれしさいはんかたあし」、されは此書をよく見て、猶與深く心をおよほさんには、道のまことを、たとりあやまつこともなからし、とおもふまゝに、一こと志るしぬ、

明治二十年七月　　千家尊福

鳥尾得庵居士口授

門人　川合清丸筆記

人に思議心あれば。物に不思議がある。此不思議は。思議心のいまだ到らぬ分際である。たとへば明暗の如く。明かなる處があれば暗き處がある。此不思議が。古往今來人間世界の。一大妄想の算盤となる。賢不肖となく。此妄想中に彷徨して。恣に妄見を起す。此妄見に相應して。一神多神の邪說をなす。一神多神。共に臆想である。思議心を勞し。不思議の分際に迷ふて。種々の夢を見る。其夢

中に。種々の邪神が現れ出來りて威をなし。散々ゝ驅使す。大根機の人は。おれを悟り。己が思議心を止め。不思議分際を。全く我が物にして。迥然として獨脱す。下根劣機の徒は。死に至るまで。其苦難にかゝる。今おばらく方便に。不思議分際を分別開示して。おれが解脱を敎ふるである。

眼に色を見る。耳に聲を聞く。鼻に香を嗅ぐ。口に味を嘗む。身に冷煖堅軟の相を知る。心に是非得失有無の見を起す。此中みづから疑ふて。決着することゝ能はざるもの。是れを不思議分際と名つく。世間の通途より云はゞ。世の學術の進むにつれて。大に不思議分際を減却せしが如しといへど。未だおれ

が源底を拂つて。眞理を安立するゝ至らぬ。故ゝ人々一分の疑心より。種々の妄想を誘起し。邪說縱横却て一層の紛雜を加ふるである。蓋し天地の間において。人の思議し能はざるものは。最も人の靈性を埋沒し。人をして蒙昧の中に墮落せしむるの。起因となるである。

此世界の明るき處は。思議分際である。此世界の暗き處は。不思議分際である。おれを明暗兩境界と名づく。明境界は。所謂學術の所論である。天文地理窮理分析等の學問は。皆此境界の事である。事物の變化。および關係を比量して知る。別に高尙の事はない。一を一に合して二となるの道理である。皆比

量知と云ふものである。其高尚らしく見ゆるは。其關係が廣大なるのみである。其比量が。微細なるのみである。愚夫愚婦の。日常の思議。分別の位と少しも違はぬ。言はゞ目の当勘定である。天文は。日月。星辰の運動。遠近の差別を測る。地理は。山川。海陸の位置。高低を測る。其他の諸學。みな此類である。彼れと是れとを比量して。廣大にも至り。微細にも至るである」暗境界は。これに反して。比量知の分際にあらず。言はゞ絶對である。比量して知るゝとが出來ぬゆゑに。其然る所以が知れぬ」されど事々物々の上に見にて。不思議である。考ふれば考ふるほど奇妙である。天命鬼神上帝等の臆想を。古來より。此

間に爲す」西洋にても。古來より。種々の學者が出で來りて論ずれども。未だ精しからぬ」哲學などの說も。大概は。架空の論に歸す。されど此學は。鬼神。上帝等の造作よ打任せぬが。一段。高尚である。おひ〳〵詮索して。此暗境界を。明るくする仕組である」人智を盡して。天理を知る。此所論の如きも。言はゞ哲學の類である」

要を取て言はゞ。古來より。此暗境界に建立するものは。一神多神の兩說である。多神の說は。多くは。愚人の鼻先の臆想である。一神の說は。妄想の深きものが。迷ひに迷ひを重ねた臆想である。故に多神の說は。迷が淺い。假令悟らずとも。物

に對して。恭敬の心を失はぬ。害が少ない。一神の説は。膏肓の病である。思ひ入れ迷ふて。固く執著す。一神を干になし。物に對して。輕慢の心を生ぜるである。

天竺に梵天あり。波羅門あり。西洋に天主教あり。回教あり。是等みな一神説である。天地創造の神と建立して。人の靈魂も。神が授與すると云ふ。古代より。此妄想を作り來りて。各々其教法を立つ。人の靈性を昧まし。智慧を失ふて。奇怪千萬の夢を見せることである。

果して神ありて。萬物を造作するや。若しくは然らざやと。初一心に疑ふ心を起すも。早く既に臆想である。何が故ぞ。神あ

りと聞て。うのこれを疑ふ心の生ずるは。他の妄想。臆想によりて。此の疑心を引き起さるゝ由る。他の妄想が緣となりて。此の妄想が生ずるである。況てや神あるべし。萬物は其の造作なるべしと念じて。一切を觀察すれば。其の安排。布置いかにも。無心に成就せし物とも思はれぬ。依て此の臆想を增長して。いよ〳〵幽冥の中に神ありて。おれが主宰となるよ相違なしと。邪見を起す。是等の徒は。心に異常の感動を起して。言はゞ氣病の類である。眞正の學者は。始めより。かゝる臆想をなさず。只々不思議分際に對ふて。是れ何の子細ぞと。平易に觀察を下すである。假令底を拂て。眞理を安立するに至

らざるも。神ありとは臆想せぬ。若し神ありと認むるほどの智慧を生ずるに至れば。彼の不思議分際を看破しての後なれば。神の立つ所の地位を奪ふである。天地間の種々の不思議は盡く神あるといふ證據にはならぬ。假令天地の廣大なる。位置、安排、運動、造作其妙を極めたるも斯くありてこそ。天地の天地たる處である。人獸の靈活なる草木の發育する。其の妙い妙である。妙なれば。必ず神ありて主宰すると云ふ臆說は立たぬ。若し妙なれば。神ありとすれば。神い妙といふ事の異名までの事である。況てや此世界に。一として不妙な事はない。不妙な事がなければ。妙も不妙

もない。さるに殊更に。妙じや妙じやと云ふは。人間の妄想である。彼の一切萬物が都合よく出來てあるは。當然の事である。不都合に出來ては。到底其の物の存在をることが出來ぬ。たまく不都合に出來合せたるものもある。現在に人や禽獸が。片輪の子を生む。これが不都合の出來である。少々の不都合は。人なれば助けて育つ。餘り不都合の物は。ことれもあたはぬ。或は胎中にて死す。胎中にて死するに非ず。生れ得ぬである。禽獸などゐては。盲目のものさへ。生育を遂げぬ。一切の事。推して知れ。されば現在をるものは。大概不都合の出來はなし。能く場合に叶ひてある。天水桶に子々が生る。小池には

鮹や鮒が生る。鯨は生れぬ。必ず其の境に相應したるものが生る。其の生れ得る境に生れたるものが相應するは固より の事である。相應せねば其の境に生ぜぬ。是等を以て神のあ る、と云ふ證據にはならぬ。

暗き處に聲あり。其の聲は人の聲にもあらず。禽獸の聲にも非ず。能く聞けば何か子細のある話のやうにも聞ゆ。人々打よりて種々の評を下し。遂に幽靈なり。怪物なりと沙汰す。勇氣あるもの。其の暗中に飛入りて捕へて見れば。一種の氣狂なりし。是れより大に人の疑心を解く。有神論をなすものも。皆此の類である。己れが智解の及ばぬ處は全く暗き處で

ある。其の暗き處より。樣々の奇妙不思議が現はる。能々觀念、觀察するに。いかにも道理のある事のやうに思はる。是れ人の力にあらず。禽獸の力にもあらず。何物の力にも及ばぬされば神ありて。主宰造作するに相違なしと思ふ。彼の幽靈、怪物の說をなすことである。

不思議と云へば。人の聲を發するも不思議である。禽獸の啼くのも不思議である。獨り人に非ず。禽獸にあらざる聲のみが。不思議では無い。只人と禽獸とは。常に目にも見に耳に聞、馴れて居るゆゑに。不思議と思はぬ。能々考へて見れば。已が聲も不思議である。彼の暗中の怪物が何か子細のある話を

するが如くに聞ゆるは。人間の言葉に相違ない。さすれば。彼の怪物は。人間である。なぜぞ人間も。元は人間の言葉を知らぬ。生き出來つてこれを學ぶ。音に自然の意義はない。みな人間で作られたものである。故に此の地球上の國々にても。其の言葉は皆々違ふ。假令人間ならぞとも。五十音の具足せるものは學ぶことが出來るであらうなれど。此の地球上の動物にては。五十音の具足せるものは。人間のみである。無心の物の音も。人より解それば。色々に解せらるゝ。彼れ無心の物がみづから已が心を說くに非ず。此方より。其の聲につれて。心を起すである。禽獸の聲にも。一句一義ありたまくにはあ

る。樂器の音にて。例して知れ。人間が聞くと。種々の意味に聞ゆる。人間より見ると。種々な意味に見ゆる。正しく人間の妄想である。人間の心から。造り出だすのである。

角あるものは。牙がない。牙あるものは。角がない。羽翼あるものは。二足。羽翼なきものは四足。乃至一切の動物を見るに。先は。彼れが生活の爲よ。都合よく出來である。若し角あるものに。牙を付けたれば。彼の有神論の證據が破れて。無神論に歸するか。左樣の事はあるまい。動物の中には。角も牙も共に無きものもある。角も牙も共に無きものゝ果報は。角あるもの。牙あるものに比して。其の生活が劣るまでゞある。これに準

じて。角も牙も。共にあるものは。角のみ牙のみの動物より。果報が勝れてあるまでゞある。此等の論は。有神論の證據にも。無神論の證據にもならぬ事である」

「靈魂の事は。人々。種々の姿想をなす事であるが。一類有神論を執ずるものゝ說に。親より此の身體を分離するとき。靈魂も其の一部を分離すると思ふものあり。其の親も。其の親より分離し。漸々に。天地の始め。人類の始めに逆上りて。眞最初の人は。神より此の靈魂を。付與せしに相違ないと思ふ。是れは暗き處より漸々暗き處に入り込み。終に當途もなき處に墮落せしものである。第一人の靈魂は親より分離せしもの

と云ふ事が未だ落著せざるに。おれを執じて。遂に箇樣の處まで臆想を起おし。段々暗がりより。暗がりに入りて。天地の始めとやら。人類の始めとやらを。姿想をするである」よしんば。始祖一二人より。漸々に分離せしと。假定するも。古來より地球上に生れたる人の數は。億萬恒河沙數なるべければ。其の死するや。靈魂斷滅して。跡方もなければ。ろれにて世話なし。若し生は親より分離し。死は一塊の靈魂ありて。散失せぬものとなせば。天地の間。何の處にか無量の幽靈あるべし。此の幽靈の一々の始末には。さすがの神も。隨分難儀すべき事である。惡き幽靈は地獄に落し。善き幽靈は。天堂にも上すべし。

此等の差排も隨分面倒なる次第である。たとへば小兒が一枚の紙をきり散らして無量の數となし夫れを氣にして狂ひ廻るゝ同じかるべし。されど件の神はまだしもよけれど彼の幽靈どもは途方に暮れ寧ろ神が串戯に我々を造り出せしゆゑ箇樣の迷惑ありと小言を云ふなるべし。始がなくて終りがある其の終りの始末は困却の事である。或る小兒がいたづらをせしに其母が小言を云ひければ此の小兒大におこりて箇樣のいたづらものを誰が生みたぞ元の如くにして返しくれと怒鳴り立てたる事ありし思ひ出せばをかし此等の說は目のこ勘定の間違である。

近頃の新聞に犬が子を生みしに天窓だけが人間の姿であつたと云ふ事である想ふに是れは人間が犬と交合して出來たもので有うがさりとて淺間しき事である此の人は生ながら畜生道に墮落せしものである しかし異類のものと交合しては大概へ業力が違ふゆゑに子は出來ぬ筈である。されど犬も人間も胎生のものだから惑業によりては感ぜぬとも云へぬ人間の當然から云へば犬に掛想する筈もない犬に掛想するぐらゐならば乞度子は感ぜぬものと云ふことは出來ぬ若し箇樣の怪しき子を生みしものとすれば其の靈魂は犬の靈魂と人間の靈魂と半々である此等の靈

魂の差排には神も隨分に困り入るおとである。
動物の中にありて人の禽獸に異なる所のものは思議、分別の心があるに由る。此の思議、分別の心が迷ひともなり悟りともなる。聖賢の人世に出でゝ正法を扶持し邪見を斥け人の靈性を護る悟りとて別に飛離れたる子細あるにあらぜ。妄想を遠離して一切の事物を正しく是非差排するの智慧を得るを云ふ。本末を失ひ輕重を誤り實を以て虛となし虛を以て實となし他に向て吉凶禍福を求むる。これを迷ひと云ふ。思議、分別の邪路に入るがゆゑである。一念主となる處を誤まれば十念百念乃至千萬念もおとゝく誤る。尺の間違

ひしものを以て物を尺をが如く何くまでも誤るおとである。
靈魂の沙汰は且らく置く。即今心の働を見よ。此の世間一切のものは大概人間の果報で出來てある。何も神の世話のいらぬ事である。天に在りて日月星辰の運行して終世光を放つ。これも人間の果報から見て面白い事である。彼れ日月星辰が面白く見せるではない。光るから妙だといへば光るものは日月にも限らぬ。螢や腐木なども光る。動くから妙だと云へば空氣が動いて風となる。緣によれば土塊も動く。珍らしからぬ事である。假令かゝる品物が天に飾りてあるとす

るも。人間ならでは。見るものは無い。禽獣は知らぬ。彼が福分にあらず。穴中。暗窟の中に。生を受くる虫などゝ。日光さへ。彼が福分でない。地に在て山川草木も。人間の果報である。山水の面白きも。つまり氷に土である。人間が。己が福分から。面白く見取る。草木の花實も。同じことである。花がみづから自慢はせぬ。實がみづから自慢はせぬ。花實の手前より云へば。何の好惡もなく。出來た儘である。皆人間が。己が福力にて建立して。妙とも美とも見るである。家屋、器物、乃至、一切の珍寶の如き。皆人間の妄想で作る。人間の果報で感ずる。禽獣の果報より看よ。金銀等の如き珍寶も。猫に小判である。土塊も同じ

ことである。一切動物の果報も能々おもへば。面白き事である。雪隱の糞の中に生ぜし虫の爲にゝ。糞が此上なき上味である。此上なき世界である。人が糞を放て。此の糞虫の世界を作る。彼れに上味を與へる。彼が爲の神である。造物者である。此の造物者も。糞を放てはならぬと云ふ時節が來らば。嘸かし困るであらう。されば糞を放るは。人間の業である。彼れが爲に世界を造り。上味を與へるとゝ云はれぬ。恩を彼れに被せて。報を望むことゝ出來ぬ。なぜぞ。人は己れの業として。糞を放たまでゞある。彼れの世界は。彼れが業より感ずる世界である。彼れの上味ゝ。彼れの福分である。己れによりて知れ。

今此の人間世界の果報へ。おとゞく。人間の福分より感ぜる事である。神が世話して出來たものでない。悉く人間の心より作りなしたものである」

一類の者あり。曰く。人の種々に物を造作するよ比べて。此天地は神が造るに相違ない造る物がなければ造られたる物の無き筈なりと」此等は眞に淺薄なる說である。第一人が種々の物を造作すると見るは。大に間違である。其作るやうに見ゆるは。人の欲に任せて。思ふやうに形を變ずるまでゞある。其物より云へば。十の八九。破壞せし有樣である。木を切り。石を碎き。土を燒きなどして。家屋器物となす。本の形より云へば。破壞である。人の欲に相應して。造作せしやうに見ゆるである。其の家屋器物の上より見れば。家屋器物と云ふ品物が出來てあるに非ず。同じ人間よりこれを見て。家屋器物とおもふは。人間の欲情が同じきによる。禽獸などが見れば出來ても居ぬ。破れても居ぬ。在の儘の形である。本の儘の木や竹である」此等を能々考合せて見よ。人間へ人間の福力にて。種々の物を建立する。大概其物に實躰はない。實相はない。此方の妄想にて見る時。種々の形が出來て見ゆる」同じく是れ鐵なり。海に浮べると船となる。沈むれば碇となる。碇が浮くと。碇が破るゝ。船が沈むと。船が破るゝ。皆人間の欲に相應し

たる時出來たやうに見ゆるである。一切の物事推して知れ。されば人間が物を造るを比して。天地萬物の現在するを。神が造作せしと云ふとはならぬ。なぜぞ人間が物を造りし例がなきゆゑに。造らねば出來ぬ。と云ふ道理が立たぬ。此等の說は。有神論者の妄想である。愚人を誑かす說である。又一類の者が。妄想して云ふ。神は幽冥の主宰なるべば。一切の處に居て。一切の事を知るの大智大能あり。物として。おれが恩德を受けざるはなし。只知らぬものが。大恩德を背きて。種々の邪見を起すと。此說をなすものゝ。大分妄想が增長して。箇樣の氣病を取付れしものである。なぜぞ。此者を對して其

の證據はいかにと問へば。必ず云はん。天地萬物が證據である。別に證據とては無い。神なれば必ず箇樣の大智大能を具するを相違なし。人の知らざる處を知り。人の能せざる處を能し。善を見ては喜び。惡を見ては惡む。是に與して非を斥ぐ。妙靈幽玄にして。人間の議り知る所にあらずと。又汝何を以ておれを知ると問へば。必ず云はん。我れ心に感じておれを知ると。此心に感じて知ると云ふゝ。直に氣病と診斷をべき證據である。此の臆說を子細に分析して見よ。神があるなら。其の有る所以が知れねばならぬ。天地萬物があるとて。これが神のある證據にはならぬ。若し知れねば幽冥の主宰だと

云ふ説は立たぬ。幽冥の主宰だと云ふ説が立たない時は。此説は。つまり空論である。妄説である。人間の議り知る處に非ずと云へば。人間にして知るべき道理は無い。故に我れ心に感じてこれを知ると云ふ。尤も此説をなす者は。かゝる氣病に取付かれしものゆゑ。條理外に。我れ獨りこれを會得せりと思ふである」或る臆病の者が。暗がりを歩行て。墓を蹈つぶし。圖らざる罪づくりせり。さぞ墓が恨むで有らうと。これを思ひつゞけて。家にかへり。寐んとせ。偶々睡を催せば。大の墓が現れ來て恨みの眼を見張り。兩手をひろげて攫み付かんとす。これに驚かされて。終夜睡らず。夜の明くるを待かね。件

の處に往きて見れば。墓にはあらで。腐れたる瓜が蹈潰してありし。此者大に安堵して。一念の迷ひの恐るゝ事を悟りしとかや」前説の氣病も。なほ此の墓のたぐひである。一念神がある」相違ない。我が知らぬ處を知て居るに相違ない。怖き事である。いかにも此神の味方となりて。安心に此世を過したいと。迷ひに迷ひて。終にかゝる氣病に取付かれしものである。いかにも感じて居る。妄に感じて居る」△昔天竺にて。佛の御弟子が。梵天外道を調伏せん爲にとて。梵天を祭りし宮に入り。梵天の像に坐して。托鉢の食を食て在りし。天竺の風俗にて。食を不淨のものとせ。其時。梵天外道の

坊主が出來りて。これを見て大に怒り。汝何ぞ無禮なるや。梵天王の尊像を穢すや。疾く去れ。速に去れ。去らざれば。其分にしては置かぬと。怒鳴つけゐれば。佛弟子。徐に說て曰く。汝が敎法の說を聞くに。梵天は。一切造化の主宰にして。大智大能を具し。一切の處に居て。一切の事を知ると。果して然るやと。梵天外道。對て曰く。然り。梵天王は。大智大能あり。一切の處に偏じて。一切の事を知ると。佛弟子曰く。然らば。此像は木像なれども。此木像のある處。卽ち梵天王の居る處なり。我れ佛弟子なれども。我れの居る處。卽ち梵天王の居る處なり。此食の在る處も。なほ梵天王の居る處なり。今梵天王の上に。梵天王

を坐せしめ。梵天の食を食す。何ぞ無禮と云ふや。何ぞ梵天を穢すと云ふやと。外道閉口して默然たりしと云ふ。昔よりかゝる妄說をなせしを知るべし。

總じて人間の業力は。手强きものにて。其心に憶念すると。種々樣々の物が現はる。狐狸が誑かすに相違ないと憶念せると。おのづと怖くなる。怖くなるほど。憶念の力が募る。箇樣なる時。つひ狐狸が誑かす。西洋諸國にても。昔の狐狸は。人を誑かせしよしなれども。今時の狐狸は。人を誑かすことは出來ぬ。昔の狐狸も。今の狐狸も。狐狸に相違はない。段々世の中が開けて。人が賢くなり。狐狸は畜生である。人間を誑かすほど

の力も智慧もないと思ひ切て。箇様の怪しき憶念を起さぬによりて。狐狸も致方がない」日本にても。或る山村にて。狐が動もすると誑かして。人々難儀をなせしに。或る剛氣のものが云ふに。狐の肉を食ふ時は。狐が誑かさぬものなりと。因て人々狐を狩りて食ひしに。案に違ひぞ。狐が誑かさぬやうになりし。これより子供が生るゝごとに。必ず狐を取りて。食はしむるを。常例となすと云ふ」是れも至らぬ事なれど。寧ろ誑かさるゝより遙によし。併し是等は狐狸の事なれば。彼れも心のあるものまゝ。時には人の憶念に感じて。誑かすこともありとしてよけれど。近來流行する。おつくりとが云ふもの

ハ。三本の竹の上に板を載せ。三人集りて。其上に手を載せ念ずると。此竹と板とが。人の云ふことを聞きわけて。動くと云ふことである」箇様の心なき竹木さへ。人間の憶念の力で動きいだす。動き出すといよ〳〵信ぜ。信するといよ〳〵念力が強まる。丸で獨角力を取るやうなものである」此れに例して人間の念力の。手強きことを知れ。已れの念力で已れを誑かず。これを愚人は不思議と思ふである。感通などゝおもふである」

又一類の者が斯く思ふ神の有無はつまり詮索の出來ぬ事である。無き證據も立つれば立つ。有る證據も立つれば立つ。

何れを非とし。いづれを是とするおともならぬ。太古野蠻の時より。今日。文明開化の世にいたるまで。人間の大概は。神を祭り神を崇む。一神ならざれば多神。甚しきは禽獸。木石をも神とす。されば神を立つるは。人間の性情である。若し人間の性情とすれば。多神より。寧ろ一神説を以て勝れりとすと。斯うである。此の臆説。一應は通人めきて。面白きやうなれど。道理に叶はぬおとである。成程。太古より今日の世に至るまで。一神、多神、種々の神を祭りて。おれを信ずるおとはある。即ち此の一大妄想が。人間の迷惑である。人類の災厄である。此の災厄を除き。人をして安穩ならしむるが。聖賢の事業である。

此の迷惑を斷じて。人をして正理に歸せしむるが。聖賢の心願である。此の迷惑。此の災厄を。其儘に差置くならば。一神、多神の説も入らぬ事である。人々の考へに打任せ置て可なり。學問も入らぬ事である。教法も入らぬ事である。道理も入らぬ事である。さすがに箇樣に打捨てゝ置くおとは出來ぬ。そおで多神よりは一神がよいとか。一神説よりは多神説がよいとか云ふ説も起る。成るべく人の迷惑の少なきやう。成るべく人の災厄を免かるゝやうにとの心願である。一回おの心願が動き出だすと。直に此の人間世界に等流し來りて。聖賢の心願となり來る。學問、教法、種々の道理を。是非、分別する

おとも出來る。取りも直さず。是れが聖賢の事業と云ふものである」箇樣よ說き來ると。邪見の徒はなほ執着して。斯く云ふ。神だけは古から今にいたるまで。有無が知れぬによりて。論ぜぬがよいと。斯うである」若し古から今にいたるまで。有無が知れぬによりて。論ぜぬがよいと云へば。一神、多神の是非、正邪も知れぬ事である。一神、多神のいづれか正。いづれか邪と云ふおとが知れぬとすれば。寧ろ一神說がよいと云ふも。道理のない事である。道理がなければ。寧ろ人々の妄想に打任せて。置くべき事である。敎法も入らぬ。學問も入らぬ。打任せるがよいの。打任せぬがよいのと云ふ沙汰も入らぬ」

或る者ハ。なほ執じて云ふ。一神、多神ともに。有無の證據は無いなれども多神說より。一神說が高尙である。眞らしく思はる。其害も幾分か少ない方である。因て一神說と立つるがよいと」此の臆說も。前說に似て。少し浮氣の沙汰である。神の有無も分ちぬに。勝手に寐せ起しは出來ぬ。眞實が多神なれば。一神說と云ふ。人間の妄想を以て。眞實の神を打つぶす道理である。眞實一神なれば。多神と云ふ。人間の妄想を以て。眞實の神を打潰す道理である。いまだ何れが眞實と云ふ事が知れねば。妄りに差排をるおとは出來ぬ。共に眞實ならざれば。其の眞實なるものを發明して。一神、多神の臆想を。打破るべ

きである」眞實の道理もなきに。一神説を高尚とするハ。其者の癖である。通論では無い。なほ多神説を執るものが。一神説より。多神説が高尚なりと。思ふに差別はない」其害が少ないと云ふも。同じことである。一神説より戰爭も出來る。人の國を。亡ぼした事もある。茲にいたれば。寧ろ。一神説の方が。災害が深ひ。箇樣の癖説は。何くまでも癖説である。道理に叶はぬ事である」

人の禽獸に異る處は。此の思議心がある故である。此の思議心があれば。是非、得失、有無、正邪を分別する。迷ふ者は。此の是非に迷ふ。此の得失に迷ふ。此の有無に迷ふ。此の正邪に迷ふ。

つまり分別が正しからぬ。分別が正しからざれば。思議分際の事物も。以上眞暗である。況てや不思議分際は。遠くして遠じ。夢にも見ざる所である」されば不思議分際を。分別開示せる以前に。先づ思議分際を正さねばならぬ。思議分際を正さんとすれば。第一人間の妄想臆測を。打破らねばならぬ。此の妄想臆測は。目を見張りて。夢を見ると同じ事である。夢に分別するは。思議分際。不思議分際の差別もなく。丸でゞしに夢である。論ずるに足らぬ」されば此の大夢を。いかゞして覺せかと云へば。別に六かしき事はない。高が夢である。少しく大聲に怒鳴り付れば。覺るに相違ない。試みに呼起して見よ」

目は見ぬ事を見たやうに思ふ。耳に聞ぬ事を聞たやうにおもふ。鼻に嗅ぬ事を嗅だやうに思ふ。口に味はぬ事を味ふたやうに思ふ。身に觸れぬ事を觸たやうにおもふ。乃至有るものを無いやうに思ふ。無きものを有るやうにおもふ。非を是のやうに思ふ。是を非のつもりて。種々樣々の妄想を起し。臆測を爲す。みづから己が心を味まして知らぬ目に見ぬ事を見たやうに說く。耳に聞ぬ事を聞たやうに說く。鼻に嗅ぬ事を嗅だやうに說く。口に味はぬ事を味ふたやうに說く。身に觸ぬ事を觸たやうに說く。乃至有るものを無きやうに說く。無きものを有るやう

に說く。是を非のやうに說く。非を是のやうに說く。此やうに說く言語文字の世中につもりつもりて。種々の邪說となり來りて。人間を惑亂す。彼のやうに思ふ心と。此のやうに說く說とが。內因外緣となり。因緣感應して。人間世界の昏睡病となる。此の病原を尋ぬれば。分別がはつきりせぬから起る。分別がはつきりせぬは。不正直から起る。苟くも正直の心があれば。胡亂の事は言はぬ。胡亂の事は思はぬ。詩三百篇。思無邪である。左樣な人は。知らぬものは。知らぬとする。解からぬものは。解からぬとする。强て妄想臆測はせぬ。妄想臆測せぬによりて。智慧が正しく起る。此の正智慧を以て。是非を正して

見る。正邪を判じて見る。一切世界に顯現する事物に徵して。眞理のある處を知る。聖賢の遺經を玩味して。道德の歸する處を知る。世間の虛妄の言說を排して。人の靈性を護る」天地間に箇樣の人も。古から隨分ある。一神、多神の妄說、妄見を起すものばかりでは無い。鼻先の料簡で。此の人間の事理を差排し。是非と誤り。相師ゐて。暗がりから。暗がりに墮つるものは。氣の毒な事である。憐むべき事である」

多神說も。種々あるが中に就て。禽獸、草木を神として。おれを信じ。これを祭るは。大なる誤りである。狐狸が長壽したとて。おれが神にはならぬ。草木が老朽たとて。これが神にはならぬ。長壽した狐狸も。やはり狐狸である。老朽た草木も。やはり草木である。おれを信ずるは愚である。おれを祭るは。迷ひである」。是等は言ふに足らぬ事であるが。其中理に於いて許すべき多神說がある。聖人もおれを信じ。王者もおれを祭る。天地の德を尊崇して。天神地祇とする。山川の德を尊崇して。山靈河伯とする。田園五穀の德を尊崇して。社稷とする。苟くも生民の利をなすものは。其德を尊崇して。これを祭る。左傳に民は神の主なりとある。民は主人である。此の主人の福利を助け護るものが神である。且らく神と名づくれど。別に靈妙不思議があるでは無い。只其德を尊崇した名である」なぜお

れを尊崇するぞと云へば。人を尊崇する趣である。唯に聖人、王者が。人を尊崇する爲のみでは無い。人々相互に尊崇する趣である。たとへば。親を尊崇する者は。其親死して後も。其の取用ゐし器物までも尊崇する。其の使役せし臣僕までも尊崇する。其親の福利を助け護りし功德を思ふ。古に終を愼み遠を追へば。民の德厚に歸すとある。人間の智慧で。少し考へて見ると。分明な事である。秦の始皇帝は。松に太夫の位を授けたと云ふ事がある。是等は僻事である。已れ獨りを尊崇するの餘りに。箇樣の僻事が出來る。阿房宮を建つるとて。蜀山を伐り盡したと云ふ。生民の利を思はぬから起つた事であ

る。此の生民の福利を思ハねば。天地も尊崇するに及ばぬ。山川も尊崇するに及ばぬ。社稷も尊崇するに及ばぬ。天地山川、社稷は生民福利の淵藪である。其德が。直に一切生民の福利である。其人を愛して。屋上の烏にまで及ぶ。人の誠實心である。此等は。彼の造物者などの空論では無い。道理のある事である。又人鬼と云ふ說がある。是れも道理のある事である。聖人賢人が世に生れ出でゝ。此人の爲に。大功德をなす。英勇豪傑が世に生れ出でゝ。此人の爲に。大事業を起す。一國を利するものあり。一郡を利するものあり。一村を利するものあり。一家を利するものあり。最下の愚夫愚婦も。其の子孫を利す

る。利に厚薄、近久はあれど。其力に應じ。其分に應じて。此人の爲に。現在、將來を利するの德は。同じ事である。今日現今に存在して。人の目に見に。人の耳に聞き得べき。人間世界の福利へ。悉く祖先が勞苦、經營せし餘分である。此の身躰、血肉も。祖先の身躰、血肉の餘分である。此等は空論では無い。實々其通りである。人間の智慧で分別すれば。分明である。茲に由て知れ。人鬼を祭るは。當然の事である。一國に功德あるものは。一國の祭を受く。一郡一村に功德あるものは。一郡一村の祭りを受く。家門に功德あるものは。家門の祭りを受く。且らく人鬼と名づくれども。其實は世に亡き人を云ふ。亡者の事である。邪見の徒は。亡者とて。幽靈が空中をぶら付て居て。これを祭らざれば。飢餓するといふ事はあるまいと思ふ。是れに至て淺薄な考である。なぜぞ亡者とて。現に此世に生れて居たには相違ない。見た人もあるに相違ない。今日現今。其の亡者たちの仕遺したる事業もあるに相違ない。されば。此の天地間に存在せし。證據は十分ある。其の證據が十分あれば。死去て後ち。其の靈魂が盡滅して。無に歸すると云ふ證據がなくば。此說は立たぬ。盡滅するで有らうと思ふのは。例のあらう說である。迷と云ふものである。不正直の心底である。此の人鬼の說は。彼の造物主宰神などの說とは違ふ。現に存在せし

に相違ない證據は分明である」しかし此の亡者の靈魂有無の說は一切萬物の生滅をる所以の理を考究して判斷をべき事なれば今は且らくされを措きて此の亡者を祭るは直に斯く分別をるがよい此の亡者と此の功德事業と一致である此の功德事業と此の人類と一致である なぜぞ此の亡者生前の一念心が其儘此の功德事業である此の功德事業によりて我々の享受する福利は我々の身體および心念と一致である此外に人間の德はない」譬へば家屋を造るが如し其の能造者の一念が思議分別となり來る其の思議分別せし通りに所造の家屋が現はる言はゞ心の影である」此の

亡者の一念の影が現在人間の心を引起す緣となる現在人間の心は此の亡者の一念の影である影が影を寫し出す全く一致である」されば亡者の生前の種々の功德事業が何くまでも亡者の一念心のある所である現在人間の心を生起する因緣である福利である身躰である先づ斯うである」斯く信じかく祭るによりて人鬼が安慰する其の功德が明赫である其の福利が長久する現在將來に續いて人間の德が全たい子細に思へば分明な事である」此の世間は人間である人と人と物と人との間に其の道德が成り立つ人を離れ物を離れては道德も無い此德天地と

合す。古に亘り。今に亘りて。變易ない。其至れるに及でゝ。禽獸草木にまで及ぶ。これを一視同仁と云ふ。一視同仁とて。同じやうに見て。慈愛する義では無い。如上の趣を。能々考へて看よ。天地の德が。直ゝ人間の德である。萬物の德が。直に人間の德である。鑄型に入れて。造つたやうなものである。寒來きば衣を重ぬ。これが其儘德である。福分である。暑來れば衣を脱ぬ。これが其儘德である。福分である。春は耕し。秋は收む。夜が明くれば起る。日が沒すれば休む。花を看て樂み。實を拾て食ふ。此中に人間の道がある。用を節して物を愛せ。其福分は盡ぬことである」これをもつくり我が物にして居るが。聖人王

者である。儒者が。儒道は仁義である。禮樂であると主張すれど。仁義禮樂は。節目である。人々をして。如上の德に相應して。心を起さしむる方便である」此の道理を解せぞして。仁義仁義と云ふは。不覺である。不覺なるによりて。儒者同士で。種々口論が起る。ろおで莊子が。盜跖にも仁義ありと云ふ横鎗を入れて。儒者を困らせる。儒者が腹を立てゝ。異端である。左道であるといへど。莊子は高く吹て居る。畢竟つまらぬ口論である」

如上の道理を解せぬ者から。これを見れば。天地山河も一塊の芥である。田園樹林も。沙礫荆棘である。古人今人も。犬猫同

様である。兄弟朋友も。南蠻北狄である。己が情欲に任せて事を行じ。愛すれば物を濫り。憎めば物を賊ふ。獸の荒れたるが如く。緣に觸るものは。殘害を被ふる。其身の果は。狂ひ死に死ぬ。人と生れ出でた福分はない」されば天地、萬物の德へ。直に人間の德と知らねばならぬ。此の天地、萬物の德を尊崇する。我が德を護ると知らねばならぬ。茲に至りて。天地人の三才一致である。能所の差排である」我が心に叶はぬとて。所緣に憎み怨その心を生ずるは。其人の福分の盡る時節である。これを天神侮り輕んずるは。其人の福分の盡る時節である。怒り。地祇悲み。人鬼哭そと云ふ」

又鬼神と云ふことがある。古人が明にしては人物となる。幽としては鬼神となる。と云ひし」明とは。目に見えてあることを云ふ。人も物も。目に見にてあるから。これを明にしては人物と云ふ。幽とは。かすかと訓む。目に見にぬことである。目には見にねど。物に付き添ひ。人に付き添ひて。其影が顯はるゝ。其影に付て。人が知るに因てあすかである。これを幽にしては鬼神と云ふ」此の鬼神の事は。怪力亂神と云ふて。人の迷より生ずることが多い。中に就て。聖賢の人も。ことを信ずる一理がある。易に。精氣物を爲し。遊魂變を爲す。是故に。鬼神の情狀を知るとある」中庸に。鬼神の德たる。其れ盛んなるかなと

れを視て見にす。これを聽て聞にず。物に體して遺すべからぞとある」又國家將に興らんとす。必ず禎祥あり。國家將に亡びんとせ。必ず妖孽ありとある」是等は皆聖賢の人が鬼神を信ぜし證據である。聖賢の人が。何とて目にも見にぬ。耳にも聞にぬ事を信ずるとなれば。所謂不思議分際を。丸こかしに。鬼神と云ふ異名を付けて。これを觀察したものである。今此等の聖賢が。此の不思議分際を觀察して。鬼神の有樣を悟つたか悟らぬかは知らぬが。其の言句に付て。おれを判斷をると斯うである」精氣物をなそと云ふは。人にもあれ。物にもあれ。目に見にる物は。精氣の凝り結ぼれたものである精氣が

凝り結ぼると。物となる。精氣の解は。餘ほど六かしいが。精とは。くはしと訓む。しらげるとも訓む。にりすぐれたことを云ふ。氣とは。目に見にねど。其働きの著しきものを云ふ」人にて云へば。勇氣、氣力、氣分、などと云ふおとがある。草木にて言へば。生氣が衰へる。生氣が盛んになるなど云ふ。天地で言へば。春ハ春の氣がある。夏は夏の氣がある。秋は秋の氣がある。空氣、電氣、暖氣、等の名もある。此等の名目に類して知れ」扨天地の精氣が。次第に凝り結ぼれて。物をなそ。ろこで物には。一々天地の精氣を含有ま。て。分際〻に相應そる。其の精氣が。追々退減すると。物が衰へる」此の天と云ふハ。青雲の上を云ふでな

い。地と云ふも。足下を云ふで無い。此の世界を。丸おかしに言ふ言葉である。且らく言葉が無いに由りて。其の上を覆ひ。其の下に塞がりきるもの。卽ち天地の名をかるである。箇樣に。天地の精氣が凝り結ぼれて。人物をなすが。此の精氣の物に寓をるゝ。眞に條理がありて。一定したものである。春去り夏來り。夏去り秋來り。秋去り冬來る。此の條理一定である。人が生るゝと。赤子より段々成長して。四十、五十より。又段々老衰をる。此の條理一定である。禽獸、草木より。微細の物に至るまで。物として條理の一定せざるものはない。箇樣に。條理一定の上に異變を示を事がある。おれを遊魂變を爲すと云ふ。遊

とは。あそぶと訓む。ぶらづく意味である。魂とは。たましひと訓む。こゝろとも訓む。精氣結ぼれて物をなす。其物の上に現はれて。變をなすことである。今人の心も魂である。眠らんと欲すれども。眠り得られぬは。魂が生じてあるによる。此魂は。精氣より生ずるものかと云へば。左にあらず。精氣衰へても。魂ますゝ增長するおとがある。重き病人などが。少しの事にも驚き。平生に思をぬ。氣ゐせぬ事までも思ふ。其未だ物に寓せぬ以前は知らず。物に寓せし所より見れば。此魂は。精氣の生ずる所でゐ無い。おのづから天地の中にある。此魂が。幽冥にぶらつき居て。種々の變をなすと云ふ事である。迷ひ

の魂である。迷ふてぶらくとする中。物に感じて變をなす。おれを能々考へ得れば。鬼神の情狀が知れると云ふことである。孔子は斯く言へれた事がある。操ればすなはち存し。舍つれば則ち亡す。出入時なく。其鄕を知ることなきは。唯心の謂ひかと。されば鬼神は。一種心の異名と悟られたものと見ゐる。中庸の。鬼神の德たる。其れ盛んなるかな。これを視て見ゐども。おれを聽て聞ゐども。物に體して遺すべからずとあるも。全く此の趣である。淺薄の了簡から云ふと。心は我が心だから。直に知れたことである。目にも見ゐぬ。耳にも聞ゐぬなど。大そうな事を言ふほどのことでは無い。況して鬼神などゝ

は。以の外の事じやと思ふ。よく考へて見よ。眼ありて物を見るが。心を見る眼は無い。耳がありて聲を聞くが。心を聞く耳は無い。眼耳鼻口は外境界に對して功能があるが。內心に對して所詮はない。鏡の裏を見るやうなものである。自心と云へば。直に我が物のやうなれど。我が思ふやうにはならぬ。みづから自心の有樣を知らうと思ても知れぬ。偶々此れは我が心じやと思ふことは。心の癖である。其癖を除いて。外の境界によりておゐる思の外は無い。一口に言へば念である。此念此思は。定まつた姿は無い。念々に生滅して。跡方もなきものである。全く心の作用である。此の作用を起す心の全

躰は。いかにと云ふに。自ら知らぬ。目に見にぬ。耳に聞にぬ。されど物に體して遺すべからぎである。其德は目の前に顯はれて。盛んなるかなである。我も知らぬ。人も知らぬ。物も知らぬ。されを知れば已に人と云ふ名である。我と云ふ名である。物と云ふ名である。其人と我と物とに體してある。通じてある。されを鬼神と云ふ。隱顯出沒はかり知られぬ。心と名づけしも。假の名である。魂と名づけしも。假の名である。鬼神と名づけしも。假の名である。且らく方便に名を立つるまでゞある。名を取除けても。此事ハ取除くことは出來ぬ。されを不思議と云ふ。

天地の間に。此不思議がある。物に現はれて。精氣となる。人ハ現はれて。神魂となる。此神魂が歸着の處を知らぬを。遊魂と云ふ。ぶら〳〵と飛び歩行て。物に感じて變をなす。明眼の者よりされを見れは。此世間に。遊魂變を爲し。妖をなし。孽をなすも。ある事である。人間は至治を望み。安寧を望むが。當然である。時ハ遊魂變をなして亂が起る。此亂も。一朝一夕にして起らぬ。其起る前に。人間が何となく苦を感ぜる。不平を懷く。此苦。此不平。共に貧富。强弱。智愚の別なく。盡く感じ。盡く懷く。天も昔に變らざれど。此事がある。地も昔に變らざれど。此事がある。山川。草木も。昔に變らざれど。此事がある。此事あれ

ば必ず流言が起る。歌謠がはやる。此根もなき流言を愚者は信じ智者は半ば疑ひ終に種々の妖孽をも目に見る。人間總躰に斯くの如き時は自ら天地も感じて天變地異も起る道理である是が所謂遊魂變をなして條理を亂る姿である。人間の大病である」此病氣が段々に增長すると上に君王も無く下に臣民もなく倫理亾びて親もなく子もなし。是が遊魂化して惡鬼となる有樣である。蘇秦張儀の辯孔子墨子の智を以て一人一人に諭したとて、箇樣の事は出來ぬ。人々自ら歸する處があり安ずる處がありて容易に動かぬものである」一回動き出すと辯を以て說かず智を以て誘はずとも俄

然として起り忽然として變ず。人々其歸する所を捻れ其安ずる所を去て亂に趣く。是を人に惡德あれば惡鬼便を得て其惡を助け人に吉德あれば善神來り集て其善を助くと云ふ箇樣な事も無しとは言はれぬ。畢竟人間の妄想妄念より起る事であるが此妄想妄念の起るのも奇妙不思議である。一概の理窟は言はれぬ事である」されど鬼神論よりして種々の說が出來りて日月宿曜方位の吉凶禍福を說くに至る。甚しきは人獸の魂魄が祟をなすなど此等は正論では無い」しかし善人も處によりては危難に遇ふ事がある惡人も時によりては快樂を受る事もある。れ等を强て差排すれば。

宿曜、方位の説も起るゝとである」

我が日本の神道は多神であるが、是れは一段面白い事である。天地造化の順序を立てゝ、これを天神七代とす。人間の事理を差排して、これを地神五代とす。此の天神七代、地神五代の説は種々差排の仕方もあるべきなれど、畢竟斯うである」天地の初めは混沌である。混沌とは、なり形の定まらぬ姿である。たとへば泥海の深いとも淺いとも、穢いとも、奇麗なとも、見分けの付かぬ如し。其中清くして輕きものが上て天となる。濁て重きものが下て地となる。斯く天地が分れて始めて生ずるもの、其狀葦牙の如し。乃ち化して神となる。其名を

國常立尊。又の名を天御中主神と云ふ。これより次々に神々が現はるゝ。其の七代目を諸冊の二神と云ふ。面白き事である。天地の初めは混沌である。人の議り知ることの出來ぬ境界である。此の境界が天地と判かるゝと、始めて人が分別することが出來る。兎に角上に現はるゝが天である。下に現はるゝが地である。其中に一物が生ずる。狀葦牙の如しである。水中に水おけの出來るやうなものである。此の葦牙のやうなものが直に天の主ともなる。地の主ともなる。天地の主宰とも、人間の主宰ともなるほどの德が。此の一物わづかに生ずる時、已に定まつて居る。其次の諸神は、其の一物が段々に

成熟して成立つ順序である。面足惶根尊に至て全く具足す。面とゝなり形である。なりかたちが滿足すると云ふことである。惶根とゝ威光が生ずると云ふ事である。此の威光とは。神德である。神とは自然に發達してある不思議の名である。「これまでは獨化である」諸冊の二神にいたりて獨化にして偶生である。伊弉諾、伊弉冊とは。いざなひいざなふの義である。因緣して萬物を生ずるとである。此の因と彼の緣と。因緣相合するに非ざれば。萬物は生ぜぬ。佛經にも。同業吸引して。因緣をなす。此の因緣を以て。衆生相續すとある」要を取てこれを言へば。天地自然の法である。其法の現はるゝ處に。其

德あり。中々人間の思慮を以て取捨、安排ぜべき分際にあらぜ。看よ人の此世に生ぜる。父母一念の業感を以て。此生を招く。其初め。胎内に托生するとき。天地未分である。父と云ふべからず。母と云ふべからず。子と云ふべからず。已に父と分れ。母と分れて。狀葦牙の如しである。假令。狀葦牙の如くなるも。已に既に天地の主宰となる德がある。人間の主宰となる德がある。此神が天御中主である。國常立である。獨化の德である。他の造作ではない。自の作畧では無い。天然自然の德である。人々此德を含である。此德がなければ。生もない。身躰もない。面白き事である」箇樣に神德顯現して。常に一切の因とな

り。緣となり。其因のある處よ。必ず其緣を見る。其緣の在る處に隨逐して離れ得ぬ。されを偶生と云ふ。姑らく邪見を捨て。正直に憶念して見よ。眼の前に見にてある。されを不思議と名づく。正念を以て見取る者は。此の不思議が分明に解し得らる。彼の一神說、造化說の如き。天地萬物を。神が手づくねに造ると云ふやうな。淺薄の說ではない。早く其の正邪を知らんと欲せば。我が神道の所談は。生るゝと云ひ。生むと云ふてある。神が勝手に造ると云ふては無い。此處が。第一正邪の分れである。邪見、正見の分かれである。古聖人が人を憐みて。正見より說き置かれた事である。是故に。我が　天皇。世々

此の神德を尊崇遊ばして。國土、人民を撫育したまふ。此の人民は。神々の生みたまひし。大事の寶である。神人感應して。悠久に此德が顯赫してある。眞に面白き事である。支那古聖人の趣と。其理は易ること無し。

眞正哲學　無神論一終

無神論二

鳥尾得庵居士口授
門人 川合清丸筆記

要を取ておれを言へば。一神多神。種々の言說は。悉く人間の一大妄想より生起をるおとである。其中。一神說は。立たぬ理窟を立て。迷ひに迷ひたる臆想である。多神說は聖人賢人が。理によりて立置れし事もあれば。概して云へば。凡見、凡智にて不思議分際より顯現し來るまに〳〵名目を下して。是れも神じや。其れも神じや。鬼神じやと。臆想せしまゝの事である。此の凡人が凡見、凡智を取るに非ざれども。此の凡見、凡智

にて感應せし事が正直である。不思議分際を論明する。よい證據である。此の證據を取除いて。強て別に不思議が有ると言ふは。所謂人間の感覺をることに非ざれば。以上空論に歸を。啻に空論に歸するのみに非ず。不思議分際と云ふ名目も。思議分際と云ふ名目も。凡夫の凡慮から起ることで。假令、此外に深き子細があるも。つまり人間の關係す可き事に非ず。大海の底を探つたら。何か有らう。天地の外を尋ねたら。何か有らうと。都表もなき臆想の外は。畢竟じてなき事である。其れ等捉空の妄想は。所論の外として。平たく此の不思議分際に注目して。見取るがよい。箇樣に神と名づけ。鬼と名づけ。魂

と名づけ。心と名づけ。種々薩陀に名目はあれど。等しく不思議分際より現はるゝ異名なれば。此の不思議の本躰は。果していかなるもの歟と。縱に考へ。横に考へて。其の合點の行かぬ所が。所謂不思議分際である。これを一大疑團と云ふ。此の一大疑團が起らねば。迷ひも覺めぬ。迷ひが覺ねば。正しき智慧は起らぬ。正しき智慧が起らねば。不思議分際の事も。以上方角の違ふ事である。元來妄想が種々樣々なるによりて。理窟も種々樣々に思へば。思はるゝものである。さりとて妄に比量比知の見を起して。萬物を取集めて。理窟を並べるも不是じや。幽靈、怪物、鬼神、上帝、天狗などを持出して。不思議がる

も不是じや」假令王者聖人の立て置きし事は。一理あるにもせよ。眞正の眼より見るときは。畢竟じて。妄想の差排と云ふものである。且らく正理は隨順し。道德に合するゆゑ。人間世界にては。許すべきである」遊魂を收めて歸着を示す。是れは人間世界に全たい。人間が悉く。此の不思議分際を開悟せぬと。て。矢庭に事を闕ぐと云ふほどの事はない」邪說を退けて。人間の妄想を。人間の德義に合するやうに。成敗すれば。今日は無事安泰である」此の成敗とても。迷ひの凡夫が。勝手に出來ぬ。正智慧を得たる。聖賢の事業である」人々、正智慧を得て。悉く聖賢となるも。亦妙じや。志あるものは。工夫して見

るがよい」

一切の物に對し。一切の處に於いて。いつも人間が片相手になりて。理窟を言ふおとであるが。此の理窟が間違ふと。爲る事成す事が。以上間違ふ」此の間違の本を尋ぬると。向ふ相手から。間違を仕掛けて。うおで人間が取り間違へて。理窟を云ふかと云ふに。左にあらず。天も古から今まで天である。天に科はない。地もいつからいつまでも地である。地に科はない。禽獸、草木もうろたへ廻りはせぬ。禽獸、草木にも科はない。畢竟。人間の妄想が種々の妖をなし。孽をなす。此の妄想が。直に遊魂變を爲すと云ふて。然るべきである」天地、萬物を。不思議に

おもふけれど天地萬物も不思議に相違はない其中人々の妄想が最も不思議の第一である夜が明けて目が覺ると眞先に此の妄想が飛び出す日が暮て寐ると影をかくして何れへ立去りしとも見ぬ瞋たり笑たり泣たり悲たり丸で妖物である天地も不思議であるが箇樣な奇怪千萬の事はない天地が箇樣に空中に現れてある禽獸草木が箇樣に地上に生れてある乃至一切の物を熟〳〵考へると隨分不思議な事も澤山あるがこれを人間の靈魂の不思議に比して見ると遙かに劣た事である此の人間の身體靈魂の作用が其儘天地に現れ禽獸草木も現れ來るで有うならば此天

地も此の禽獸草木もまだ〳〵遙かに不思議千萬の事が出來るに相違ハない箇樣に考へて見ると天地も禽獸草木も此の人間の靈魂に比しては餘程下等の不思議である且らく靈魂と云ふへば不思議の一分が現れたものである此の心が動くと種々名を設くれども畢竟我々の心である此の心が動くと種々の業が現るゝ此の業が相手方の緣につれて變化をする此の心の動くのと業が現るゝのと相手方の緣につれて變化するのとは一致して其の中間ハない身體が癢きと覺ゆると直ゝ手が其處に往て搔く搔くと癢きが止む癢きは心の動くのである手の往くのは業である癢きが止むのは緣につ

れて變化するのである。物が欲いと思ふと。直に心が向ふ。其物を得れば。其心が變ずる。憎いと思ふと。直に心が背く。其物を去れば。其心が變ずる。大に動けば。大に業が動く。小しく動けば。小しく業が動く。種々様々に。其の相手方の緣につれて。變化窮りなし。箇様の事は。己れが企てゝ造るのではない。此心の自然の働きである。此働きは。みづから知る知らぬに關せずして有る。夢の中にもあるが如し。此心の働きによりて。身體も成就する。一切萬物が。都合よく出來てある。そは此心が向ふ相手の緣につれて動き。緣につれて變ずるからの事である。嫌なものは。取のけるやうに。そむけて動く。好むものは。求むるやうに。順じて動く。此の好惡、向背が。直に心の感動である。小にしては。蟻の一身にも現はるゝ。大にしては。鯨の一身にも現はるゝ。人間は。其中に於いて。滿分の所緣を成就し。にりすぐりし所緣の上に。此心が動くによりて。滿分に成就して。滿分に發達してある。曾て說きし如く。所緣に相應せざれば。其物は生れ得ぬものである。其境に相應するはうむける所緣を避けて。順ずる所緣に生るゝ。それを避る爲めに。防ぐ業が動く。此の防く業が。形に現はるゝ。順ずる所緣に求むる業が動く。此の求むる業が。形に現はるゝ。手早く言はゞ。見やうとおもふ心が動いて。眼となる。聞かうと思ふ心が動

いて耳となる。防がうとおもふ心が動いて角とも牙ともなるである」境に色がある。此色に感じて眼が出來る。境に聲がある。此聲に感じて耳が出來る。境に害がある。此害に感じて角も牙も出來る。乃至、一切の動物、植物の形體は悉く其境に相應し。其心に相應して。現はるゝものである。岩石に木の根がへばり付てあるのを見ても知れ」これを佛說に諸の法は。緣より起ると說てある。因緣果報の說は其差排が少し違ふけれど。先づはこれに準ず。正直の心から。能く憶念すると。解せらるゝ事である」近來西洋の哲學に萬物進化自然淘汰等の說がある。是等の說へ。全く此の緣起の理を。外より見かけ

て說たものである。此の心境感應の事は。至極面白い事である」

精氣、神魂の事も。別々に見るなれど。萬物唯心造の上から見ると。精氣と神魂とを。取離すことはならぬ。精氣退いて死に至れば。神魂も去る。神魂くじけいたむ時は。精氣も衰ふ。全く一致のものである。別々に見るは。且らく外より見かけて。立つる說である」草木の如き精氣のみにして。神魂のなきものは。因緣が微薄なるに由る。動物の至愚なるものと。草木の至精なるものとを。並べて見ると。さほどの相違はないと云ふ事である。箇樣に草木と隣り付に生を受けて居る蟲蟯よ

り。段々因縁の手厚き動物よ。逆りて見ると。其精氣ばかりと。神魂の具するとの際へ。たしかに分つことはならぬ。況てや草木が化して。動物ともなる。おい〳〵因縁の滿足をるに隨ひて。神魂の作用も靈妙にいたる。人よいたりて。其靈を極む。其妙を極むる。此心の底を拂て。靈妙を顯現する。此心、一切の因縁に相應し。微薄な所縁には。微薄に相應し。重厚な所縁には重厚に相應するである。人間の一身の中にも。此の事はある。毛髮と眼耳とは。一樣ではない。正直の心を以て工夫をると。直に知れる事である。されば精氣は。此心の疎き摸樣である。神魂へ。此心の親しき摸樣である。疎親の別はあれど。此心の上より言へば全く一致である。兩般は無い。此心は。天地一枚である。三千大千世界を。引包んで漏さぬ。始もなく。終もなく。大とも言はず。小とも言へぬものである。天と云ひ。地と云ふも。此心の中よ。現はるゝ影である。三千大千世界と云ふも。此心の中に。差別する模樣である。虛空の到る處。虛空なるが如く。火の到る處。緣に應じて發現をるが如し。されを始に求むると。其始を窮め盡して盡ぬ。されを終に求むると。其終に窮め盡して盡ぬ。されを大に求むると。其大を窮め盡して盡ぬ。されを小に求むると。其小を窮め盡して盡ぬ。一切の比量を離れて。直よ此心である。此心の全體を知ら

んと思はゞ直に此心に就て工夫して見よ若し此心に就て工夫をるも知れぬとならば一切の外境界に對して臆測を るは愚じや幾等臆測を勞して理窟を立つるも總て妄想と云ふものである目が有るから色は見るで有う耳が有るから聲は聞くで有らう鼻が有るから香は嗅ぐで有らう口が有るから味は嘗むるで有らう彼此を比量して其大小遠近は知るで有らう彼れと此れと其色を異にし其形を異にするによりて其變化は知るで有らう夫れは只見たまゝの事である聞たまゝの事である眞實の道理を知るとは言はれぬ眞實の道理を求むるは須らく此心に就て工夫をべし自

ら已れの道理さへ知るゝと能はざるものが已れより疎き天地萬物に求めて其道理を知る筈はない若し天地萬物に求むるとき天地萬物が我に向て求むるより直ゝ汝已れに就てゝれを知れ我は猶汝の如しと云はゞ其時いかゞ返答をるぞ況てや人間は天地萬物の中に於いて其靈を極め其妙を極む此靈此妙直ゝ是れ自已じや至て親しきものである此靈妙の德の一分が天とも現はれ地とも現はれ萬物とも現れてある斯く決定の心を起して不思議分際を看破するの門戸を開くべきである

此心の全躰大用は各々自ら悟るべきである水の冷たきを

知るも。水ゐ就て知る。火の熱きも。火に就て知る。草木、禽獣も。草木。禽獣に就て知る。これを教ふるものは。おれが水じや。これが火じや。おれが草木禽獣じやと。其物を指し示すまでゝある。其有様は。各々其物に就て。合點そべき事である。此心を知るも。猶其通りである。別に教ふべき道理はない。おれを知るものは。おれを知る。おれを知らぬものは。おれを知らぬ。種々の道理も。說ゞば。說かるゝなれど。畢竟此心の分別である。此心の作用である。此心で分別そると。種々の道理が出來る。此道理を知たとて。此心を知るとは言はれぬ。斯く言へば。取付き端のなきやうに思ふものも有る。因て佛ゝ。此心を知る

べき方便を。種々に說るゝ。佛の五千餘卷の經典は。悉く此心を說きしものである。此心を知るの方便である。其中の要目に四依と云ふ事がある。依智不依識。依義不依語。依法不依人。依了義經不依不了義經とおうである。其中智に依て識に依らずと云ふは最も大切な事で。第一に智と識との區別を知らねばならぬ。此智識の區別は甚だ六かしき事であるが。今略して言はゞ。斯うじや。智とは道理を知るの心である。識とは。緣に觸れて。心の生ずる事である。古語に。人其子の惡を知るおとなしとある。其子を愛するの切なる。其惡きを知らぬに至る。其子を愛するゝ。識である。其惡を知らぬは。無智であ

る。識が熾なれば。智がくらむにより。善惡の見分けが付かぬ。物が欲いと思ふと。つひ其物に心が赴く。憎いと思ふと。つひ其物に心が背ける。緣に觸れて。心が生じたまゝである。「禽獸が空腹になると。奔走して食を求む。滿腹の時は。何心なくごろづいて居る。おれ等を識と云ふ。」人は今日あり。明日あり。今年あり。明年あり。老あり死あり。と云ふことを知る。空腹なりとて。妄に奔走して。食を求めはせぬ。滿腹の時とて。ごろづいては居らぬ。一分の智分が。現れてあるに由て。變化の理の一分を心得て。識のまゝに行ぜぬ。見たまゝ。聞たまゝ。憎いまゝ。可愛いまゝ。欲いまゝ。嫌なまゝ。食たいまゝ。寐たいまゝに。打

任せては置かぬ。されば識を。此心が緣に觸れて。感動する儘である。一切萬物の形を。自ら作りなす働きである。」人にありては。此識の上に。智が生ぜべきが。當然である。一切の物より。靈活の力が強きゆゑ。識も隨て勝れてあるものなれば。智が生じて。此識を程よく。取治めねばならぬ道理である。なほ後のくだりに。智識の分際を。委しく說き示すべし。

一切の動物は。悉く物を怖るゝ心がある。此怖るゝ心より。疑ふ心が起る。此怖るゝ心は。自ら已れを愛する心が。異境に觸れて。感動するものである。「異境とは。馴れぬ境である。此心は。常になれた境に安堵してある。其身も心も。知らぞ識らぞ。打

任せてある。言はゞ所縁の上に生れてあるにより其所縁が。馴れた境である。其物の果報である。福分である。自ら其身も心も打任せてある。手早く云へゞ。なれた境は其物の境界である。故に一朝なれぬ境に遇ふと怖るゝ心が生ず。疑ふ心が起る。甚しきは身を挺いて遁るゝ。此れは畢竟自ら愛する心である。一切心あるものゝ欲である。欲と云ふが其儘、其心である。此欲が各々分に應じて形を作つてある力である。此力と云ふも欲と云ふも愛と云ふも。且らく假に付けた名である。畢竟此心の妙用と云ふものである。靈活なる所以のものである。身をつめると痛い。此いたいのが。靈活である。此痛

いのが何にも角にも。縁に觸れて。變化して現はるゝ。痛いのと。癢いのと。こそぐつたいのと。ひもじいのと。欲いのと。憎いのと。嬉いのと。悲いのとは。種々様々に違ふやうに見ゆれど。畢竟此心が向ふ相手の縁につれて。變るまでの事である。一々違ふ心が有るのではない。此心が活たものであるから。向ふ相手が。それに觸るゝまゝに。種々に感ずる事である。此事を。能く憶念すると。人獣の形を感ずる所以も知れる。順縁の上に生れ出でゝある所以も知れる。異境に遇て怖るゝ心の起る事も知れる。怖るゝ心が起ると。疑ふ心の起る事も知れる。それまでは識の分際である。此疑ひが破るゝと。正智が生

ぞる。此疑ひが破れねば。どこまでも迷ひとなる。種々に妄想する。種々に臆測する。禽獸などは微根のものゆゑ。怖るゝ心までは生ずるなれど。疑ひの心が生ぜぬゆゑに思議心が起らぬ。人間の中にても。至て愚なものは疑ひの心が起らぬ。智分の勝るゝものほど。此疑ふ心が起る。自ら愛をる力が強ひ。欲が勝れてある。此愛と云ひ。欲と云ふけれど。且らく物に應じた姿の名である。其實は。靈活の德が滿分なのである。人間の通途より云へば。此心の靈活な事は。遙かに禽獸より。立勝りてあるに相違ない。此立勝りたる樣子をたとへて云はゞ。鏡の如きである。禽獸どても。一面の鏡はあるに相違な

けれど。曇りて明らかならぬ。人の鏡は。至て明らかなるによりて。些細な事までが。此心に寫り來る。少し強く感ずると。樂な事でも。苦い事でも。直に此心に記臆する。此心に記臆するどは。此心に感染をる事である。是れが。此心の靈活な謂である。禽獸の中ゴても。少し根機の勝れてあるものは。強く感じさせると。記臆して居るものである。これに比して知れ。此心に感ぜる力の強きほど。靈妙なものである。其記臆は。此心に癖が付くのである。靈なほど。癖が付きやすい。靈なほど。感じが鋭ひ。總て此心の靈妙な作用は。箇樣なものである。さるゴより人間は生れて。追々生長をると。物ごとに段々感ずる

力が起る。苦樂を自づと記臆する」看よ小兒が火を攫で手を燒くと再たびはせぬ。此感覺此記臆が勝れて居るに由て終に物の形を知り名を覺こる。其形の變化するのを見て物には變化のあると云ふ事をも知り。關係をも知る見馴れぬものには不審を起し聞なれぬものには疑惑を生ぜ。已にされを知る者があつて說き諭して敎ふ。人間とて生れ出づると。此人間世界の物事に馴れて居るのではない。初め父母に馴れ。家に馴れ。友に馴れ。又父母の怪まぬものは畏れもせぬ。家に在るものは疑も起さぬ。箇樣にして一村より一國の事にも馴るゝ。其馴るゝ中に一分の疑ひ心はありて知らぬ事は

されを問ひ。されを明らめんと思ふ。此等の事にて人間は一分の智分があるを知れ。禽獸は記臆も乏いから敎ふるものもなく疑の心も起さぬものである」

此心に感覺記臆した事が思議心の土臺となりて分別を起せ。彼れと此れとを比らべて是非好惡も憶ふやうになる。人間の通途より云はゞ。此感覺が鋭いのが賢い者である。此記臆が慥なのが賢い者である」此感覺。此記臆が。思議心を引起して。種々に分別する。種々に分別して。道理を見出す。此道理を見出すと一時に智分が顯はるゝ。此事は成るほど。箇樣な事じや。此物はなる程。箇樣なものじやと疑ふ心が破れて。明

らめが付くを智分が生じたと云ふ。假令、分別をるも疑ひの心が破れて明らめが付かぬ時は、どこまでも迷ひである。自分勝手の思はくのみを思ひ募る。識に昧まされて智が生ぜぬからである」諺よ。我身をつめりて人の痛さを知れと云ふが我身をつめりて痛いのが識である。それに比べて人も痛いに相違はないと知るが智である。我も痛い事は好まぬ。苦しい事じや人も好まぬ苦しいに相違はないと知るが智である」箇樣に智は識の上より生じ來りて自と他とに通じてある道理を知る。過去と現在と未來とよ。通してある道理を知る」故に智とは道理を知るの心と云ふべきである」又識が

熾なると智が昧むと云ふは譬へば欲いと思ふと欲いに引かれて種々に分別をる幾等分別しても欲いと思ふにつれて此分別が生ずるに因て遂にわ人の物をも偷むやうになる。假令、引さらへて持往かずとも種々の手段を分別して遠廻しに取ることを考へる。一寸とした事にも此類がある。此類の分別は畢竟識に昧まされた分別の迷ひである」さるに由て分別さへすれば智とわ云はれぬ。智とは道理を知る心である。此道理を知る心は程よく識を制す。識が主宰となれば迷ひである。智が主宰となれば悟りである。禽獸などは人間ほどに識が勝れて居らぬに因て智が生ぜぬとて害も左

程には無い。されど禽獸に迷ひが無いとは云へぬ。識の上から動くときは悉く迷ひとなる。識が勝れてあれば迷ひも勝れてある。識が劣てあれば迷ひも劣てある」先づ斯うである。智と識との區別を知れ。或る性理學者が。一概に禽獸、草木に就て。天地の原理を尋ね。又天地の性は。人爲の外であるから。小兒、赤子が。性の儘である。此性の儘が。天地の性である。大人は人爲の欲があるから性を失そると云ふは。愚の至りである。所謂識の一分を見て。性と思ふものである」譬へば松の赤子。卽ち二葉のものを見て。此れが松の性じや。數百年も經し大木を見て。これハ松の欲より變じたもので。性のまゝでは

無いと云ふに同じ。箇樣な道理はない」此心の性は。須からく人に就て見るべし。禽獸などでは不十分である。其人に就くも。赤子小兒よりは。大人に就くべし。大人の中にても。聰明叡智のものに就て知るべし。此心に具足せぬものならば。人爲の欲も生ぜぬ。智と云ふものも生せぬ」これを火に喩へて云ばゞ。識ハ火の熱である。智は火の光りである。熱が熾んなれば。火が生ず。それに昧むは。燃ずとふすぼるのである。分別が不都合の處に墮るによりて。燃ハ立ぬ。一朝燃ハ立つと。光が發する」故に知れ。光は火の精なるもの。智は心の精なるもの。一切を照し盡すである」

智と識との分別は上に說きし如し。智に依りて識に依らぞとは眞實の道理を窮むるゐは必ず智に依りて發明すべしと云ふことである。識はかく有るものと知るも智である。智に由りて一切萬物の眞實の道理が分別せらる」義に依て語に依らぞとゐ言語にも有る事なれども。おもに書物を讀みて其意味を解する事である。書物は人の言葉を寫したものなれば言語も同樣である」此義に依て語に依らぞとの事は元來佛の說置れし經文の意味を解する事に付ての事なれども此事は其他よも通じてある」早く言へば易經と云ふ書物がある是れは八卦の事が書載せてある。此の易經の言葉

を其儘に說けば易とゐかはると讀む物のうつりかはる事である」經とは立て糸と讀む機の立糸の事である」故に語に依て易經と云ふ意味を取ると かゐる立糸と解すべきである。されでゐ易經と云ふ意味にゐならぬ易經と云ふ意味ゐ天地萬物のうつりかはる定理を說き示した大切な書と解そべきである」易はかはると訓ても先づはよろし經は機の立糸に譬へて道理の立糸とも言ふべき意味を著はしたものである機の立糸が亂るゝと機を織る事が出來ぬ道理の立糸が亂るゝと人間の敎へが立ぬ」箇樣に言語と云ふものは場合によりて其意味が違ふてある孟子ゴ盡く書を信ず

れば書なきに如かずとある。此れも義に依て語に依らずの義である。書を半信半疑の間に置く事ではない。義に依て解すべきである。義に合せぬ事ハ措て問はぬがよい。強て臆測して妄想を起し利發らしく是非を言はぬがよい。後世は人の妄想ばかりが熾になりて種々な臆説を出して道理の立いとを亂る。臆説の上に臆説を出し妄想の上に妄想を重ねて。おれを書に筆して人を誑かす。是が眞の狐狸と云ふものである。

一切の物事の名字は悉く凡夫が見たまゝ聞たまゝに付けたものである。段々世の中が開け往くまゝに聖人賢人が生

れ出でゝ道理を窮むることが始まる。此道理を窮むるに隨て。此名字に種々の意味が含まるやうになる。聖人賢人とても己が勝手に名字を下せばそことは出來ぬ。己が勝手に名字を下せば其下した人より外にハ解せものは無い。人間の言語。名字とハ言はれぬ。人に說き諭せども。意味を通ずるとも出來ぬ。況て聖人賢人とても。識に依て智が生ずるとであれば。目に見ぬ。耳に聞ぬ。心に思はぬ事を工夫するものではない。凡夫の疑ふ事を疑ふて道理を見開くまでゞある。道理を見開いて見れば。凡夫が想ふのと。其眞實の有樣とは相違してある。其相違の廉を種々に說き諭したものである。鬼

神などの事も昔から人間が幽冥の中にれのづから物ありて不思議をなすと思ふによりて此名がある」此事を聖人賢人が詮索して扨は鬼神と云ふは道理であると悟りて平易な語をかりて其様子を示す其言語が顯れて論とも說ともなる」されど一般人間の言語の意味はどおまでも言語の本をなすによりて學問上の言語へそれより變化したものと云ふより外はない」段々智慧の階級が違ふほど物事の見おなしが違ふて來る妄想と正智との相違は夢と現との相違となるに由り これを尋常の凡夫の語を以て寫し出す時は語の通りに解すると同く妄想の談となりて正智を

開くべき教とはならぬ故に義に依て語に依らずと云ふ事が出來る」法に依て人に依らず了義經によりて不了義經に依らぬとあるもおれに準じて知れ 茲に必用がなき故畧して說かぬ」

明らかな鏡に種々な物が寫てあるを見る おれを見たまゝより言へば全く眞の物に相違ない箇樣に我心に感ずる其儘が識と云ふものである」故に識に打任せると鏡の中にも飛込み欲ぎものなれば攫み取るべきである」されど人に一分の智が有るによりて是れは鏡じや其物は鏡の中に寫れる影じやと知りてさすがに鏡の中に飛込はせぬ此等に比

して。智に依て識に依る可らずと云ふことを知れ。其夢を見るも。なほ識の所變である。夢中にては。天地も山川も。人も我も。少しも眞の物とかはらぬ。爲る事成す事も。現在に此事がある。夢の中では。是れは夢と云ふ事は知らぬ。夢の中で夢を夢と知の智は生ぜぬ。其智が生ぜる時には。其夢が覺る。覺て後に。夢でありしと云ふ事を知るによりて。其夢中で見し事爲し事を。眞の事とは思はぬ。されば夢にもあれ。現にもあれ。識とは。其心。其儘その通りに感覺せしを云ふ。智といへれを見れを聞く外の境界の物事を。正しく分別して悟り。又我が識の所變によりて。見るもの聞くものに變化のあるこ

とをも悟るを云ふ。其中。外の境界を。正しく分別する事は。人間の當然の智慧で。大概は明らめが付く。此識の所變は。誠に凡夫の智慧では。悟られぬものである。是れが悟られぬと。迷ひに迷ふて。果は外の境界までか。怪しまるゝやうになる。眼を病むものが。空中に花の散るが如きを見る。耳を病む者が。常に風の音の如く。溪水の音の如きを聞く。同じ一室にありて。一人は暑きを感し。一人は寒きを感ぜる事もある。箇樣な事は。悉く識の所變と云ふものである。或る者が。金が欲しい。金が欲い。と思ひつゝ歩行て。おゝらに金が落ては居ぬかと。一心になりて行くうち。丁度目の前に。小判が澤山に落てあ

りしに打喜び兩手を出して。一攫につかみて。持行かんとせし折しも。是れ何を爲るぞと云ふ聲の耳へ聞ひたれば。打驚きて見れば。兩替屋の店先にて。手代番頭が勘定をするため。金を取散らして居たを。攫みてありしと云ふ。餘りに金の欲さに。其者の眼には。金の外には。人も家も見ひぬにより。箇樣な事があるものじやと。是れは識の所變を。たとへて說き し話である。まさかに。箇程の荒まし事は。大概の人にはなき事なれど。これに準じて識の所變を知るがよい。此れは人の物である。取るべからずと云ふ分別の智が昧めば。欲いと識が動くと。攫みて持行あぬとも云はれぬ。左樣な時は。人も

家も見ひぬと云ふべきである。一心一念が。丸で識に昧まされて。種々に變を爲す。目を見張て。白晝に夢を見るのである。深く心に感ずると。箇樣な事もなしとは言はれぬ。修行して智慧を磨くことをなさず。識に打任せて置く時は。段々生長をるに隨ひて。識も欲も增長して。果は犬猫同樣な事が出來る。其智慧を修行をる趣は。百端なれども。寶間比丘の因緣が。十善法語の。不偸盜戒に說てある。此等は此處の話の引續きにて。智慧を修行をるの趣を知るに尤もよし。未だ讀ぬ人の爲に。畧してこゝに示す。

佛の在世に。寶間比丘と云ふものが。始めて受戒して。佛の御

前に禮拜して申さには。既に受戒仕れり。是よりいかゞ修行して。佛智慧を開き申さべきやと。其時、佛の申さるゝには。汝が物に非るよりは。取るおとなかれと。此比丘。この一言の教を受けて。禮拜して去り。林の下に至り。石の上に坐して。自ら思惟す。今佛が。汝の物に非ざるよりは。取ることなかれと教へたまひしは。いかなる義ぞ。他の金銀、財寶などの類は。何ぞ佛の教を待んさるに。慇懃なる佛の教へ。必ず子細あるべし。今我が物と云ふは。畢竟、何物を云ふぞ。家財、官祿は。出家し了れば。我が物に非ず。取るべからず。妻妾眷屬も。出家し了れば。我が物に非ず。取るべからず。五尺の身體は果して我が物な

るか。是れも父母、血肉の餘分なり。生れ落し以來。衣服、飲食などと以て。養ひ來りし物なり。終に朽敗して。土に歸る。是れも我が物に非ず。取るべからず。眼に色を見る。是れ我が物なるべきか。此れも。內に眼根あり。外に色あり。中間に虛空あり。光明あり。衆緣が和合して。假りに此相あり。鏡にうつる影の如くにして。其實體なし。我物に非ず。取るべからず。耳に聲を聞く。是れ我物なるべきか。此れも內に耳根あり。外に聲あり。遠からず近からず。他の障碍なきとき。衆緣が和合して。假りに此相あり。谷の響の如く。其實體なし。我が物ならず。取るべからず。乃至、意に善惡、邪正、是非、得失を分別す。是れ我が物なる

べきか。此心も自ら心とは知らぬ。自ら心とは言はぬ。意と云ふ名も。心と云ふ名も。外より名づけし物なり。畢竟、見聞、覺知（みたりきいたりしたりしつたり）の影なり。其實體なし。我が物に非ず。取るべからず。此の如く決定して。智慧を修行せしかば。忽ち此心の本性を悟り。廓然として初果に入り。再たび委しく思惟して。羅漢果を得しとなり。初果とは。佛智慧を得る。初めの階級の名である。羅漢果とは。極位の名である。箇樣に識の所變を知て。智慧を修行すると。一切の迷が破るゝことである。志あるものは。始終に臆念するがよい。

識に依れば。一切の是非、分別が總て迷ひとなる。智によれば。

一切の是非、分別が。悉く悟りとなる。夢中に。種々分別するとは。畢竟、夢である。分別さへすれば。おれが智慧とは言はれぬ。盜人が物を盜む爲めに。幾等巧みなことを思ひはかりても。總て迷ひと云ふものである。我れ知らず。己れ知らず。欲に引かれて。心が種々に動くによりて。盜人の目で見ると。一切の物が。盜むべき物である。一切の事が。盜むべき事である。一切世界が。盜人の世界に見ゆる。是等悉く。識の所變と云ふものである。此人間が。生れ來るや否や。第一に已有ることを知る。次に人の有ることを知る。萬物のあることを知る。何によりてこれを知るかと云へば。形が別々に見て分かれて。其樣が

一様ならぬからである。男と云ふことを知る。女と云ふことを知る。貴きと賤きとを知る。其中に苦あり楽ありと云ふ事を知る。好き嫌な心も起る。嬉しき事もあり。悲しき事もあり。泣やら怒るやら。種々無量な事どもが。取かさなりて。此心を引動かす。箇様に引動かされて。我れ知らぞ。持前の業を働かして。一切の物事を。已がまにまに成敗す。是等の事は。識の所變でい無く。此心の外から持來るかと云へば。左に非ず。同じ人間でも。うれ〳〵業が違へば。直に利害も違ふ。此の人の喜ぶ事も。彼の人は悲しみ。彼の人の泣く事も。此の人はをかしがる。我が身を大切に思ふものもあり。人の身を大切に思ひ

て。我が身を苦しめ。命をも捨てゝ顧みざるもあり。此等にて。全く識の所變と云ふことを知れ」されど。人間の通途より云へば。大概其の業が同しき故。人間の感ずる事は。左程の變い無きものである。盗人が見ると。一切が盗人の心に相應して見ゆるが如く。此人間が見ると。一切が。人間の心に相應して見ゆる。其中、各々の宿業によりて。種々の識變もあれど。畢竟人間の業より感ずる事は。大同小異である」食も求めねばならぬ。衣も求めねばならぬ。家屋も求めねばならぬ。器物も求めねばならぬ。求める心がつのりて。食も旨きものが欲しい。衣も立派なのが欲しい。家屋も器物も奇麗なのが欲しい。此の

欲い心から見るよりで。人の物までが。浦山しくなる。まさかに盗みもせぬけれど。國に法度がなければ。隨分ともに亂暴せぬとも云へぬ。智分があり。自ら識を制する人は。稀なことである。國の法度とても。これを刑罰するおとがなくては立たぬ。刑罰を畏れて。法を犯さぬゝ。欲を制するに欲を以てし。識を制するに識を以てするに由る。諺に云ふ。痛けりや放せじや。哀れなる事である。通途人間の有樣は。先づ斯うしたもので。誠に智分が少ないものである。其少ない智分でも。取用ゐればよけれど。それは捨てゝ。妄に神佛に願ひて。罪を免かれん事を求む。甚しきは。當度もなき冥福を祈る。不思議

分際などの談には。遠くして遠し。凡夫當然の思議分際だも。眞闇がりである。箇樣な有樣なるによりて。邪見の者が。世に生れ出でゝ。種々樣々の怪談を流布し。親兄弟の敎へ。賢人聖人の法をも蔑にして。相牽ゐて。迷ひから迷ひに墮入る。迷へば迷ふほど。識の所變が甚しくなりて。果は夢中に。靈なおとを見る。白晝にも怪しき事を見る。物に對して。妙に不思議を感ず。遂に氣狂ひも同樣になりて。身を捨てゝ。おれに赴き。命を捨てゝ。遁るゝやうになる。斯る場合になり果れば。人間通途の福分を失ひて。一種奇怪の獸となる。能々正念して。智慧を修行するがよい。さも無いと。賢きものも愚なるものも。已

が識の轉變に誑かさるゝ事である」

智慧を修行するものは此識を委しく分別して次第を立てゝ知るべきである「佛の經に八識に分けて說てある第一の識を阿刺耶識と云ふ第二の識を末那識と云ふ第三の識を分別事識と云ふ阿刺耶と末那とは天竺の語である「阿刺耶は含藏の義で ふくみたくはへる ふくみたくはへる意味である末那は心の一名で意の義である此識で已れを慥めて居る分別事識とは物事を分別思慮する識である意識とも云ふ末那が動いて意識となる意の識の故に意識と名づくると云ふ解がある意は目が覺ると寐るまでは何も分別せぬとも生じてある

ものでこの言はゞ無心である意識は分別思慮することが對ふ相手になりて種々に思ひなす識である「此末那の事は昔から種々に解を下すものがあるけど取間違ひが多い餘り深く考へて鼻先の事を知らぬからである「また染汚意の名がある これは迷悟の上から下したものである「阿刺耶識は寐ても覺ても變らぬもので手早く言へば人が生るゝと阿刺耶識が起る人が死すると阿刺耶識が滅する目が覺ると末那識が起る睡むるときゝ末那識が滅する分別すべき事があると分別事識が起る分別する事が止むと分別事識が滅するである第四に眼識と云ふ第五に耳識と云ふ第六に鼻識

と云ふ。第七に舌識と云ふ。第八に身識と云ふ。眼識とは色を見て知る識である。耳識とは聲を聞て知る識である。鼻識とは香を嗅で知る識である。舌識とは味を嘗て知る識である。身識をは物に觸れて知る識である。これを前五識と云ふ。前の三識を合はせて八識となる。此心が外物に對して知識するるには前五識の外にハ畢竟知識そるゝとはない。此前五識によりて知識せしゝとを取集めて意識が分別する。これを法と云ふ。法とは聲も形もなくして意識の相手になるものである。猶眼識の相手に色がなり。耳識の相手に聲がなると。同じゝとである。此事を委しく言へば斯うである。色を見て

知るは眼識である。此色によりて。これは山じや。これは家じやこゝは人じやと分別して知るを。法と云ふ。分別事識の相手である。なぜに山や家や人を聲もなく形もなきと云ふなれば。眼にては色を見知るまでゞ。畫を見るも同じ事である。其色の摸樣で。山と云ひ家と云ひ人と云ふことを分別する。此摸樣は色に由て起るものなれど。色と摸樣と同じものとは言はれぬ。色は見たまゝである。摸樣は分別して。何と云ふゝとを知る。これを色の分段と云ふ。色の分段とは色が分々段々になりてあるゝとである。色が分々段々になりてある。に由て。摸樣がある。其摸樣が山とも家とも人とも見分けら

るゝ。これも。箇様な摸様は山じや。箇やうな摸様は家じやと。兼て心に留め置ぬ時は。只に色の分々段々になりしばかりが見にて。山とも人とも。分別が付かぬ。されに比して。法い色も形もなきものと知れ。其耳識に聲を知て。意識が分別をも。猶其通りである。聲の音色は。其儘耳識に知るまゝである。其音色によりて。是れは人の聲じや。禽獸の聲じやと分別するい。意識である。其相手は。聲に非ず。法である。聲の分段によりて人なれば何を語る。何を言ふと云ふ事を分別して。されを知る。此聲と此言葉の意味とは。同じものとは言はれぬ。聲の摸様に由て。此法が顯はるゝ。故に。法は色と聲と香と味と

觸とによりて。顯はるゝものなれど。されを聲じや。色じやと云ふことはならぬ。色聲香味觸を。別々に智識して。意識の片相手の法となり來るときい聲もなく。形もなく。色もなくして。此法がある。此法の事を。猶委しく云へば。人は色じやと云ふことはならぬ。人は聲じやと云ふとはならぬ。人は香じやと云ふとはならぬ。人は味じやと云ふことはならぬ。人は冷煖じやと云ふとはならぬ。さすればとて。聲香味觸の和合物にもあらず。車を尋ねて車なし。されど人には色がある。人には聲がある。人には香がある。人には觸ると冷煖がある。箇様な事で。人と云ふとを知れど。別々に取放しては。人

は見ぬ。これを取纏めるのは。眼識でもなく。耳識でもなく。鼻識、舌識、身識でもなく。意識の働である。其意識の相手になるものは。法である。此法を。色でも聲でもなくして。全く人と云ふ法じや。山と云ふ法じや。家と云ふ法じや。能々臆念をると。此差別をはつきりする事である。此の八識の順序は眼耳鼻舌身より。一二三四五と順に立て。第六を意識。第七を末那。第八を阿刺耶とするを。常例とす。今は解説の都合にて。これを逆に數へたるものと知るべし。

何事も。一切の物相對せざれば。此世界に顯れぬものである。譬へて云へば。光の如し。照すものが無ければ。照さるゝもの

無い。力の如し。動かすものが無ければ。動かさるゝものは無い。これを能所と云ふ。能とは。よくそと訓む。又あたふと訓む。よくしあたふの意味である。所は。らるゝと訓む。又ところと訓む。らるゝところの意味である。此の能所が對立して。一切の物事が顯はるゝ。眼に對して色がある。此色が無ければ。眼識は生ぜぬ。耳に對して聲がある。此聲が無ければ。耳識は生ぜぬ。鼻に對して香がある。此香がなければ。鼻識は生ぜぬ。舌に對して味がある。此味がなければ。舌識は生ぜぬ。身に對して觸がある。此觸がなければ。身識は生ぜぬ。意に對して法がある。此法が無ければ。意識は生ぜぬ。箇樣に。能所が對立して

一切乃物事が顯はるゝ。此心と。此の色聲香味觸法とが。人間の世界である。此外に世界は無い。此外に世界があれば。それは夢である。夢の中にも。夢に此色聲香味觸法が顯はるゝと。夢に眼耳鼻舌身意の六識が動く。夢にもあれ。現にもあれ。此心が動くと。箇樣に能所が立つ。これを心境と名づく。心はさゝろである。境はさかひである。さかひとは。心の相手方である。此心の相手方の境が。正しく此世界である。扨此境となり來る色聲香味觸法は。何かなる姿であると。詳かに工夫して見ると。意に對する法ばかりが。形なきのみならず。色聲香味觸ともに。眞實の形はなき

ものである。色は光に由て發するもので。光には形はない。色にも形は無い。聲は物と物と相觸ると發するもので。觸には形はない。聲にも形はない。香も味も觸も其通り。形はないものである。されど目に見て。色があり。身に觸れて。堅軟冷煖の相があるものは。其實體あるに相違ないが。其實體として。且ら。因緣により。原素とか云ふものが。和合して。其姿が見にるまでゞある。此原素に就て見ると。見るべき觸るべき實體はない。窮理學の說では。此原素は散じても。遂になくなるものでは無い。何くまでも存してあるものじや。と云ふ說もあれど。是は窮理學を立つる原位の爲に。方便に立た說である。い

よくの處にいたれは有るものとも無きものとも取極らぬものである窮理學では此原素の有無の議論は閣いてせぬを此學問の分際とする夫れより以上は所謂哲學の所論である」今假りに原素は何くまでも有るものとするも此草木は原素ではない此禽獸も原素ではない此家屋器物も原素ではない原素は常に集散あるも此人間は常に集散せぬ此禽獸は常に集散せぬ此草木は常に集散せぬ此人間は日々に飲食して原素を集め息となし汗となし大小便となして散ぜるなれども夫れに由て人間が殖たり減たりはせぬ人間は人間が生るゝと死るまでは

人間である草木禽獸も猶其通りである」されば此境に顯はるゝ物事を委しく詮議すると悉く實體なきものである實體なくして此事あるを假りに名づけて法と云ふ」

此心あれば此法が現はるゝ此法あれば此心が現はるゝ明鏡に對した如く空谷に叫ぶが如し此姿を變ぜれば夫れに應する影も變ず此聲を變ずれば夫れに應ぜる響も變ず此心の一念を變ずれば一切の法が變ず一切の法が變ずれば此心の一念も變ず念々變じ法々變ぜるも此心は常に恒に此心である」此法は常に恒に此法である」此法あれば此心もある此法なければ此心も無い此心あれば此法も有る此心

なければ。此法も無い。此心、此法、相對立して。無始曠劫より。盡未來際まで。相違せぬ。面白き事である。迷ふものは。此法より迷ふ。此心に迷ふ。影を逐ひ。響を尋ねて。自己心の中に。往來生死して。其邊際を見ぬ。たとへば算數の如し。一元有と立つれば。これを乘じて。天地の外を包ぬるも。乘じ盡さぬ。これを除いて。無間の際に至るも。除き盡さぬ。有の法に對する一念が。大に向ふて生じ。小に向ふて生じ。生じ生じて。何くまでも盡ぬものである。小に向て除き除くも。有の一念の除きやうはない。大に向て加へ加ふるも。有の一念の加へやうは無い。此れに比して知れ。此心、此法は斯くの如し。彼れより此れを見る

も。此心、此法は斯くの如し。此れより彼れを見るも。此法、此心は斯くの如し。其中迷ふものが。自己心識の轉變より迷ひて。種々の臆想を起し。思議、不思議の分際を見る。能々正念して見よ。此世界に何も不思議は無い。不思議と思へば。一切不思議である。不思議と思ふ其一念から不思議である。一切不思議なれば。殊更に不思議と云ふ事は無い。法れ不思議を立つるから。心より不思議の念が起る。法に思議を立つるから。心に思議の念が起る。何も對ふ相手の法ばかりが。不思議と云ふ事は無い。却て此心こそ。不思議とすれば。不思議である。心を以て不思議とするも。早く是れ法である。此心の相手方となる。

されば不思議と云ふも思議の分際である。思議すればこそ。不思議も出來る。此思議心を止むれば。不思議もない。只に彼れと此れとを比量比較して。合點が出來ぬから。其合點の出來ぬ處が。且らく不思議となる。此法の現はるゝは。箇樣なものであると。合點さへのである。此心の現はるゝ。箇樣なものである。合點さへすれば。直に合點の出來る事である。心より云へば。且らく對ふの相手は法となり來れども。其法に卽て言へば心である。我より言へば。人なれども。人より言へば我も人である。人間は禽獸と見まど。禽獸からは。人間を鬼とも見る。此心の靈妙の德が。此れとなり。彼れとなり。心となり。法となり。一切衆生

の業に相應して。現はれ來るものである。若し此心を。別々のものとして見れば。人と人とにても。此心の通ぜべき謂れゝない。昔も今も易らぬものは。此心である。其證據は。古人の書記せし事を見ると。分明に解せらるゝ。今の人の心の作用と。相違はない。全く一つものを。分ちて持しと同じ事である。これに由て。此心の廣大無邊なことを信ずるがよい。此心の無邊な功德を信ずるがよい。此心を信ぜずして。うろたへ廻ると。際限のなき事である。色は五色に過ず。五色の變は擧て言ふべからず。音は五音に過ず。五音の變擧て言ふべからず。味は五味に過ぜ。五味の變擧て言ふべからず。有情は。胎卵濕化

に過ず。胎卵濕化の變。擧て言ふべからず。非情は。草木苔菌に過ぎ。草木苔菌の變。擧て言ふべからぞ。此擧て言ふべからざるものが。一々法となり來て。此心を感動する。思慮分別を巧にして。終日終夜工夫するも。詮なき事である。終にハ。幽靈、怪物、鬼神、上帝、天狗などまでゞ飛出して。惑亂するに至る」

鳥尾得庵居士口授

門人 川合清丸筆記

一切の法を。一々取離して見ると。其姿は無きものである」されどこれを。意識にて分別すると。天も出來る。地も出來る。世界も出來る。國も出來る。山も川も海も一時に出來る。これを此心の光影と云ふ。此心より。照し出したる影と云ふことである」向ふ相手の法に。實有の姿は無けれど。此心にて實有と分別すれば。此法ハ何くまでも實有となり來る。天を實有となし。地を實有となし。世界を實有となし。國を實有となし。山

も川も海も實有となし。家屋、器物、身體も實有となして。其中に心識が轉變する。これを名づけて妄想と云ふ。正智慧を修行するものは。此妄想の有樣を委しく知らねばならぬ。現在に天地萬物と。種々に形が見ゆ分かれてあれど。畢竟四大が假りに和合して。種々の形に見ゆ分かれたものである。假令形は種々なるも。其實へ四大に相違はない。青黃赤白もろ〳〵の雜色をとり交ぜて。畫を書たやうなものである。其模樣どりにて。山とも川とも。人とも家とも。木とも花とも。鳥獸とも見ゆれど。其實は種々の色より外には無い。四大とは。堅き性のものを。假に地大と名づく。濕ふ性のものを。假に水大と

名づく。煖な性のものを。假に火大と名づく。動く性のものを。假に風大と名づく。此の地水火風の四大とても。實々に不變な性質があるのでは無い。悉く因緣より生じて。箇樣に見ゆるである。此事は說明しが長くなるにより。今へ且らくこれを差置く。扨此の地水火風の四大が和合して。天地萬物が形づくると定めて見ると。其形は只模樣のみ。其實は四大の外は無い。此模樣に謝されて。實有のものと思ひ。四大が假に和合して。形を見せると知らぬは。直に妄想といふものである。何となれば。此四大が假りに和合して形をなすも。彼れの四大より人を誑そのでは無い。此方の分別から。種々樣々に

見取るのである。畫ける色の青黄赤白もろ〳〵の雜色が其色の通りに見にて。違はぬなれど。それを見るものは。色を見ずして。其模樣を分別するが如くである」さそれば此色を去りて。別に畫があるかと云へば。畫はない。此の四大を去て。天地萬物があるかと云へは。天地萬物ハない。故ヨ此四大の相を見ぞして。天地萬物を見る。それを妄想と云ふ」されば四大が假に和合して。種々に見ニ分かきて有る、草木、禽獸、其他、人間に至るまで。悉く四大なり。四大の外に物は無いとおもふも。なほ四大の相に誑かされた妄想である」四大ハ。地水火風である。草木、禽獸は。草木、禽獸である。草木、禽獸と。地水火風と

は。一所にはならぬ」故に此四大の相に關らぞして。此草木、禽獸を。正しく知らねばならぬ。正しく知るには。此草木、禽獸の姿に現はるゝ四大の相を除きてみれば。直に草木、禽獸といふ法である。我よりは法といへど。彼れ草木、禽獸に卽て云へば。心である」此法はなしとは云はれぬ。此心はなしとは云はれぬ。木ヨ就ていへば。幹もあり。根も有り。枝もあり。葉も有り。花もあり。實も有る。禽獸に就て云へば。目もあり。鼻も有り。耳もあり。口も有り。手もあり。足も有る。箇樣な相ハ。四大の相とは相違である。四大を假て。此相が現はれて有る。それを有情非情といふ」有情とはいろ有る衆生といふ事である。禽獸

などを云ふ。非情とい。こゝろ無き衆生と云ふ事である。草木などを云ふ。情とは。識の事である。なさけと訓む。一心より云へば。非情とても。心外の法ではなけれど。識が生ぜぬものゆゑ。動物とは相違してある。扨箇様に分別して見ると。天地萬物と一口に云へど。悉く心外の法はない。此心が生ずると。有に見ける。此心が滅すると。無に見ける。有と云ふも。無と云ふも。畢竟、此心の生滅である」手早く云へば。目が覺ると。己れで已れが有に見ける。眠れる時には。已れで已れが無に見ける。無と見る心もないから。眞の無である。これを有無の相と云ふ。此有無の相に迷ふて。人間が種々に妄想を起す。空を攫み

風を捉ふるやうなものである」眞實の法は。上の如くなるに。人間が妄念を起し。日月を相手に。天といふ名を下だし。土や水を相手に。地と云ふ名を下だし。山と云ふ名を下だし。海と云ふ名を下だし。川と云ふ名を下だし。一々の模様に。一々の名を下だして。世界と妄想する。此世界に生れてあると思ふ」木を切り。石を碎き。土を燒き。それを縦にし。それを横にし。丸く角く。長く短くして。己が妄想の如く模様をなし。家屋と名づけ。器物と名づけ。種々薩陀に名づけて。妄想するである」因は果を離れず。果は因を離れず。妄想より建立したものは。畢竟妄想である」されば人間は。全

く一大妄想の世界で。此妄想より。外に。世界は無い。此妄想によりて。快樂を受くるを。人間の福分と云ふ。此妄想によりて。苦惱を受くるを。人間の災厄と云ふ。此人間が。平等に快樂を受くべき妄想を。世間の道と云ふ。此外よ。世間の道は無い。此人間が。一切衆生の快樂を快樂として。親の子を愛するが如き妄想を。出世間の道といふ。法は心を離れぬものなれば。此心に緣じ來るものがさとくく快樂を受くるとき。此心が快樂を受くる。且らく世間、出世間と云へど。畢竟、妄想の差排である。なぜぞ此妄想は。此心の功用である。功德である。一切世界は。此心の光影である。此心の所造である。此外に一法も

なきが故に。此妄想が。直に眞實である。これを悟るを。悟りと云ふ。これに迷ふを。迷ひと云ふ面白き事である。生れ出ると。直に此世界を。一念の中よ作り出だす。死し去ると。直に此世界を。一念の中に納め入る丶。一生一死。悉く已が心の業力に任せて。或は廣大莊嚴の世界を建立し。或は狹隘卑劣の世界を建立し。其中よ游戯する。其中に苦勞する。其中に死する。其中に生る丶。此心の光影の中に。善惡、生死の業を造て。無始曠劫より。盡未來際まで。往來して際限ない。面白き事である。此心ハ。天地一枚である。三千大千世界を引包で漏さぬ。此法生ずるも。此心は生ぜぬ。此法滅するも。此心は滅せぬ。此法往

くも。此心は持ち往かぬ。此法來るも。此心は持ち來らぬ。明鏡の中に。其影は千變萬化するも。其明體は千變萬化せぬと。同じ事である」此法に迷ふて。人間が種々に業を造りて。苦樂を受るも。此心は常に。苦樂の相を離れて。苦樂に隨順せぬ」看よ玉樓、瓊筵に。一生を送る王侯も。生るゝ時に生れ來り。死し去る時に死し去る。寤寐、動靜ともに。己が勝手にはならぬ」樹陰草上に。一生を送る乞食も。生るゝ時に生れ來り。死し去る時に死し去る。寤寐、動靜ともに。己が勝手にはならぬ」彼れに於ても一分を增さず。これ又於ても。一分を減せず。任運として住る所はない。一念が苦に住る時に。苦境が現はるゝ。一念が

樂に住る時。樂境が現はるゝ。若し念々住る所なければ。王侯も乞食も。同じ生死である。同じ寤寐、動靜である」是故に。一念わづかに動けば。一切の法。悉く苦樂である。樂に非ざれば苦である。一念わづかに動けば。一切の法。悉く自他である。人我である。人に非ざれば我れ。我れに非ざれば人である。自に非ざれば他。他又非ざれば自である。一念生じて後。我れあるを知る。一念生じて後。人ある事を知る」

此心は。一切の苦樂を離れ。此法は一切の自他を離れて。此一念が。獨り箇樣な變をなす。此一念の事を精しく考へて見る

がよい。直に迷ひと悟りとの分際が。はつきり知れる。茲に一言せねばならぬ事がある。法と云ふは。元來、此心の生滅の相を指して言ふ事である。ろれは前説に説き示したが猶精しく云へば。生死も。寤寐、動靜も。畢竟、此心の動く相である。此心の箇樣に動くは。此心の持前である。當然である。苦しい時も。樂な時も。苦も樂もなき時も。動くものである。王侯、乞食の同じきのみでは無い。人も獸も。一樣である。扨て此心の動くのを。なぜ法と云ふとなれば。緣につれて動くから。法と云ふである。此心に分別して知るから。法と云ふである。此分別する心も。なほ法と名づくるは。一念起れば。おのづと此心に知て。

どこまでも。此心の相手になるによりて。法と云ふ。源泉の流れ出づると見れば。直に源を離れて。後に出づる泉のために。前流となるやうなものである。いつがいつまでも其通りである。際限はない。猶前に説きし法の處を。委しく考へ合せて。知るべし。

此法が生ずると。此心が其生に相應して。生ずるやうに見る。此法が滅すると。此心が其滅に相應して。滅するやうに見る。此法が來ると。此心が其來るに相應して。來るやうに見る。此法が去ると。此心が其去るに相應して。去るやうに見る。されど此心は生じもせぬ。滅しもせぬ。去りもせぬ。來り

もせぬ。此心は。此生滅去來を知れども。常に恒に動搖せぬ。譬へば空中に。雲霧の去來、起滅するが如く。雲霧は去來、起滅しても。虛空は常に恒に去來、起滅をることは無い。此心もなほ其通りで。能々工夫すると。直に知れる事である。此心の全躰を指して。佛經には。涅槃妙心と說てある。不生不滅の本心である。此本心が眞理の原である。此の不生不滅の心と。生滅の心と和合して。阿刺耶識を成ずと。大乘起信論に說てある。楞伽經の說よ。照らし合せて見るも其通りである。此事を現在に分別して見ると斯うである。不生不滅の心と。生滅の心と。二つあるでは無い。不生不滅の心は。生滅の心に就て云ふ事

である。此心の生滅が。其儘、不生不滅である。水と波との如し。波は生じたり滅したり。大波、小波もある。水は生じたり滅したりはせぬ。大にもならぬ。小にもならぬ。されど水を離れて。波が別にあると云ふ事はならぬ。水の有る處よ。風が吹けば。其風の緣につれて。大波、小波がたちて。生滅する。此の不生不滅の心が。一切衆生の本體、本性である。此の本體、本性のある所に。生滅の心が起る。幾等生滅しても。本體、本性の生滅すべき筈は無い。佛の經に斯うした譬へがある。黃金を以て。種々な形を作る。或は人物。或は禽獸。或は草木、花實と。其模樣は幾等變化しても。其の地金の黃金に差別はない。模樣はない。此

の如く。一切衆生の阿刺耶識も。涅槃妙心と生滅の心と。常に恒に和合してある。涅槃妙心へ地金である。生滅は模様である。此等の喩へにて。不生不滅と生滅と和合して。阿刺耶識をなぞらへを知るがよい」されば無始曠劫より。盡未來際まで。此心のある處に。此法が現はるゝ。此法此心。暫くも間斷なきがゆゑに。一切の衆生身が。直に是れ阿刺耶識である」前に說き示しゝ。人が生るゝと。阿刺耶識が生ず。人が死ぬると。阿刺耶識が滅すると云ふは。一樣の解で。深く論ぜると。箇樣な道理である。一人一箇に限りたゝとでは無い」其の末那識に至ては。本より一人一箇の事で。一々の衆生に。一々の末那識を

成就してある。此の末那識を離れて。阿刺耶識の生滅を。引起そべき因緣がなきゆゑ。此の末那識より云へば。阿刺耶識も。分々に別れて見ゐる。譬へば大地に就て見れば。山河、草木、人獸も。大地の上にある。國々の封境より云へば。山河、草木、人獸は。其の國々の封境に分るゝ。言語、風俗、政敎などは。悉く其の國々にて違ふ。末那は。國々の封境を分つた上から。云ふやうなもので。人々別々なものである。さるに依りて。阿刺耶もおのづと。別々に生滅を起し。別々に業種子と云ふものを。含藏へるである」末那は。意と飜譯してある。染汚意と云ふ。染とは。うむと訓む。汚とは。けがをと訓む。人が生れてから。境に對し

て。種々の妄想をなして。此心は種々な事を染め付けて。種々に汚してある趣を云ふ。此の染みつき汚れが。おのづと阿刺耶識の上では。業種子となる。譬へて言はゞ。大地の上に住する人間なれども。國々の政敎にて。此の人間の上に。種々な心持を起さしむ。これを末那にたとへ。此の人間の心に。已れ知らぬ處に。種々な業種子が成就してある。これが現はるゝときは。彼の國の人と。此の國の人と。おのづから別々な因緣を別て。別々な果報を受ると同じ事である。業種子とゝ。業は心の動くと云ふ。心の働きの意である。種子とは。たねと云ふ事である。心が動くと。人々別々な業が出來る。其の業のたねを

云ふとで。言はゞ。梅は。梅の種から生し。櫻は。櫻の種から生るやうなものである。阿刺耶に含藏へるときは。業の種子となるによりて。已れもかゝる種子が。此心に含藏へてある。と云ふことは知らぬ。此の業種子の事は。實に分別が六かしき事であるが。能々憶念をすると。はつきりするとである。されば末那ゝ。畢竟、阿刺耶の生滅の上に就て。人々別々に作り。別々に起す趣を云ふ事と心得て。間違は無い。總じて。八識とは云へど。識が八つあるのではない。識の作用に就て。精しく分別して說いたものである。畢竟、一識である。一心の作用である。箇樣に分別〳〵して說かねば。此心の平等なる樣子と。差別

なる様子が分明ならぬにより佛が委しく説れたものである。

業種子の事をなほ委しく分別して茲に説き示さん。元來此心は生じもせぬ滅しもせぬものなれば人間が死だとて此心が死だ後までも片隅の方できと〳〵して有るべき筈はない。去りとて死だ後は丸で立消にて跡方もなきものかといへば其樣な殺風景な事は此心の靈妙な上から理において許されぬ事である。若し此の人間の一人が死で夫れにて此心が滅しきるものなれば天地萬物も一時に滅しきる筈である。左樣な事は現在に無い。此心は一切衆生と同體である。差別せべき所はない。只其の差別は人間は人間の身を感じて眼耳が別々なるによりて差別の相があるまでゞある。此心が生ずると其の生じた外面に法が現はるゝ。此法に相應して此心の德が現はれ來りて眼耳鼻舌身ともなる。されを此心の差別の相と云ふ。此心の外面は云はゞ皮で此の皮一重が彼れと此れとの分際である。小兒の身體は小さいにより其心の生ずる外面が狹い。大人の身體は大きなにより其心の生ずる外面が廣い。蟻の一身の如く象の一身の如く此の外面の廣き狹きにつれて此心が生ずる。大は大に生じ小は小に生じ小にしても生ずる所はない。大にしても生

ぜざる所はない」兎に角向ふ相手のある處に此心が生じて。内外の分際はない。腹が痛むのは腹の中に向ふ相手が出來るからである」されど法と心と相融ずれば自身で自身を知らぬ。是れも心と法との働きが止むのでない。左程好きでもなく嫌ひでもなきものは此心に深くゝ感動せぬやうなものである。好きと云ひ嫌ひと云ふは心に烈しく感動を起そからの事である」此心が偏るからの事である」さるにより。微細な識分の生ぜるのは己れみづからで感ぜぬ者である。五臓六腑の中迄も心と法とは相對して有る筈で偏ると病をなす心と法とが相融ぜぬによる」箇様に此心の生ぜるの

は内外の差別もなけれど。且らく一身を以て此心の領分と定め。皮一重内を我となし。皮一重外を天地萬物となして。差別を立つる。此差別を立つる中にも。はや差別の出來がたきものがある。呼吸を看よ。外にありては空氣である。内にありては人間の大事の息である。暖氣を看よ。外の世界が寒いと。内の身體の暖氣を外に引とらるゝ。外の世界が暖なと。内の身體にまで。此の暖氣が押込む。湯水を看よ。内の身體に水氣が拂底になると。直に外から運び入れねばならぬ。其他委しく云へば。皆此類で。現在に箇様な事がある。人間が内外の分際を立てゝ。氣張り込んでも。火や水や空氣は平氣なもので。

内に入るも。内に入るとは思はぬ。外ゑ出るも。外に出るとは云はぬ。内外の分際を追通して。其の在の儘の處が。火である。水である。空氣である。此處をよく〳〵工夫をすると。平等の中に。差別を立つるは。全く因縁の上から起ると云ふことがはつきり知れる。一挺の蠟燭に。火をともし。其火を百本、千本に分かちて。燈すときは。百本、千本にもなる。されど。本の蠟燭の火を。半分づゝ分かつて。持ち往くのではない。各々の蠟燭が。各々の分に應じて。光を放つ。本の蠟燭より。大きなる蠟燭に移すときは。廣大なる光も放つ。左樣なれば。此等の火は。必ず別々なものかと云へば。左にあらず。若し別々なものなれば。

一本より外のものに移すことは出來ぬ。是れを因縁と云ふ。因となるべき一本の蠟燭に。火があれば。縁を與へると。どこまでも分かれて。天地も照らし盡す。されど本の火は。己が因縁に應じて。以前の通りである。現在目の前に箇樣な法がある。これに比して。此心の差別、平等の處を知るべきである。火の性から云へば。此火が因でもなければ。縁でもない。心の性から云へば。此心が因でもなければ。縁でもない。天地一枚である。其因縁のある所に現はるゝものである。一切衆生(いきとしいけるもの)れ生死も。此の因縁の上から有る。此心の生死ではない。此因縁の事を。委しく論ずると。彼の業種子(ごふのたね)の事が知れる。

此心ありしより以來。此法がある。此法に迷ひ。此心に迷ひて。業種子を造る。手早く云へば。人を憎いと思ふと。直ゟ憎いと業じた業が。此の心地に染み付て。深く阿刺耶識の中に含まてある。其始へ至て些細なものなれど。善きにつき。惡きに付き。いつとなく增長して。再たび向ふ相手の緣が出來ると。つい大事になる。萬事箇樣な道理と知るがよい。此の業種子が全く因である。因があれば。いつか緣は出來るものである。欲いと思ふ事も。嫌ひとおもふ事も。憎いと思ふ事も。可愛も思ふとも。種々薩陀に思ふ業が。悉く已れ知らぬ間に。心地に落ちて。阿刺耶識の中に含まれて。業種子となる。見た事聞

た事。邪見を起して考へた事までが。一切擧て業種子となる。乃至、慈悲、善根な事より。殺生、偸盜。などは固より。總て此心に一たび業じた事は。どおまでも業種子となりて。此平等の心地に落ちて。因となる。譬へば草木の種の如く。花が咲き。實がのると。其實が地上ゟ落ちて。其時いたれば。芽を生じ。枝を生じて。雲をも凌ぐほどの大木となるに。同じ事である。今日現在に爲す事は。現在の業である。此業は。過去に作りし業種子が。緣に觸て現れた姿である。花が咲き實がのると。同じ事である。此實が此の心地に落ちて。又も未來のための業種子となる。どおまでも。果のなき事である。扨おの業種子は。種々薩

陀なるもので。時には善き業も動き。時には惡き業も動くなれど。つまり善業の强きものは善道に生るゝ。惡業の强きものは惡道に生るゝ。善道とゝ。善に向ひて。此心が運び動くとで。人の足を動かして。道を行くに同じく。一歩一歩より進む。一念一念より善は善に進む。惡もなほ其通りである。箇樣に業が定まると。世界が其業に相應して出來る。山河大地禽獸も。別に變りは無けれど。樂むものゝ心から見ると。何となく麗しくも見ゆる。苦むものゝ心から見ると。何となしくも見ゆるやうなものである。此の心境の事は前に委しく說てある。此處の業の話と照らし合せて見るがよい。或者

が二人連れにて旅行せしが何か言ひ上りに攫み合ひ。採み合ひ。大喧嘩を始めし處へ。一人の者が通りかゝり。其中に立入りて。漸く取分けて。其喧嘩の始末を聞けば。一人の者が云ふには。已が金を拾ふたのを。此者が是非半分よこせと云ふから。夫れゝ道理のなき事である。已れが拾ふた金だから。お主は三分一を分けて遣うと云ふと。左樣な道理はない。二人で旅をして。同じ道を行き。同じ道に金が落ちてあるのを。お主が拾ふたとて。三分の二を取る筈はないと。理不盡を云ひ募るから。つい喧嘩を致したので。外に子細はでざらぬと云ふ。其金は幾等あるのかと問へば。まだ拾ひハせねど。若し拾

ふとらと云ふ話でござると『箇様な影も形もなき事に妄想して果ハ其身を忘れて攫み合ふ若し金が眞實に落ちてあらうならば夫れおろ一大事じや識に打任せて妄想をると出逢ひがしらに斯る事が出來る』況してや業種子を十分に造りて此の心地に埋め置くからは其の因縁が到來をると。いかなる事が出來ぬとも云はれぬ『芝居などで種々善惡の有樣を造りて見せるが一々分別して見ると因縁のなき事はない盡く自他の業種子より善惡も出來る苦樂も感ぜる事である』

現世現在には此の業種子より種々の人事の吉凶禍福善惡、

苦樂も因縁して起る事は少し考へのあるものは誰も承知する事で心學とか云ふ教には殊更に此事を說くと云ふ事である夫れも大概は鼻先の事とばかりに見もし聞もをるなれど此事は實に鼻先の事ではない『固より業と云ふものは其の實體のあるものではない業を亡ぼさば無くなるもの業を造れば出來るもの無くさうと造らうと勝手なものなれど識に付て廻れば どおまでも此業が出來る智に依れば此業が段々減じて終に滅するにも至る されば此の業種子が人間の死した後までも存在してあるべき筈は無いやうなものなれど萬物唯心造の上から見ると此の肉身と云

ふものは無くて獨り業のみがある」此業が緣に相應してある間は生涯である。此業が此緣を離るゝと死ぬるである。假令緣を離れたとて此業が滅すると云ふ道理は無い。業があるので緣があるので業が出來るのでは無い。故に業を亾ぼして仕廻はなければ善業惡業の差別なく必ず再たび緣によりて惡善の二道の中に生を受くべき筈である。此心の自性自體はいつも變動のなきものなるにより此の變動のなき心地に業種子を深く埋めて置くと此心の生滅の相につれて又も現はれ來る道理である。此業の生じ現はるゝ處が必ず已れが後身と云ふものである」此心平等であ

る。此法も平等である。地水火風も平等である。人と我との分れは只此業のみで此業より外に差別はない。善人惡人と云ふも只此業で業より外に善人惡人はない」未來生れ來るも已が前身を知らぬ時ハ別人の如しといへども全く別人ではない。此業の相續する間はどこまでも其物の生々死々である。夢中の已れも現の已れも別人では無い。夢として取除けて仕廻へば別事のやうなれど其夢の中にて苦しい時ハ眞に苦しいに間違はない。前生を捻れて仕廻へば罪もなきやうなれど惡き果報を受る時節が到來すると心持のよきものでもない」是故に程よく識を治めて業を除くべき事で

ある。此業さへ除き盡せば。直に涅槃妙心となる。不生不滅の金色の身體である。其の生滅は。身體の模樣である。是等の事は。前の話より能く工夫して見ると。直に知れる事である」此業の轉變の上から。果報を示して。佛の經には。天上、人間、修羅、餓鬼、畜生、地獄の六道が分かちて說てある。此事も。眞實なる事である」

要を取て。これを言へば。此の業種を斷じ盡して仕廻へば。此身此儘で。輪廻はせぬ。此身此儘で。生死を打越して。生れもせぬ。死にもせぬ。其死ぬるのゝ他より死ぬるやうに。見ゆるのである。其生るゝのは。他より生るゝやうに。見ゆるのである。

これに比しても。直に此の業種によりて。未來に輪廻して。六道の中に。後身を受るゝことを知るがよい」此身よも科はない。此心にも科はない。此身は地水火風である。死ぬれば。元の地水火風にうれ〳〵還るまでゝある。此心も。一切衆生と。平等である。天地一枚である。何も生死のあるべき筈はない。況して往たり來たり。六道に輪廻すべき物柄ではない。當處に生じて。當處に滅す。念々生じて。念々滅す」其中に因緣を逐ふて。果報を受るものは。只此の業種である。此の業種が。一回結ぼると。何くまでも果しはない。此の業種の外に。人もない。我もない。禽獸もない。此の業種によりて。緣を引て。種々、異類、異形

な衆生が出來る。少し工夫して見ると。分明な事である」

ふの業種の畏るべき事を。目のこ勘定で云へば現在斯うした事がある。昔源平兩家とて。至て繁昌な家がありし。此の兩家の事は。種々な物語ものもあるにより。小供までが能く知って居ることである。其中源家に就て云へば。斯うである。滿仲、頼光、頼義、義家など。代々打續て。英雄ばかりで。朝廷へも忠義を盡し。親へも孝行を盡し。家來家門までも。能く愛撫ふて。中々の人ばかりである。現に八幡太郎義家が。奥州の後三年の戰の時。弟の新羅三郎義光と云ふが。京都にありて。兄の軍の難儀なる事を聞て。その援にとて。終に官位をも棄てゝ。奥州

へ下りし事がある。是れにて。親子兄弟の情の深かりしを知れ。其後爲義の代になりて。子が八人ある。惣領を義朝と云ふ。末子が鎭西八郎爲朝である。時に王室に亂が起る。崇德院と申す上皇と。其御世嗣の帝と。御父子の間に。種々の事が重なりて。終に軍となる。其時爲義ハ。上皇の御味方となり。義朝は帝の御味方となり。親子の間ゝて。互に弓箭を引くゝとゝなる。此軍に。上皇御敗北かされ。遂に爲義も。其子義朝を頼みて。降參せしゆゑ。義朝が帝に願ひて。已れが功を捨てゝ。命乞をなせしに。其時帝の御言葉に。清盛は伯父さへ殺せり。然るに義朝ハ。親を殺すことが出來ぬか。不忠なものじやと。御立腹

遊ばされ〜ゆゑ致方なく家來の鎌田政家と云ふものと相談して人の手に掛けて殺さすより此方にて殺すがよからうとて遂に爲義を殺せ實に此時の有樣は王室より源平兩家に至るまで隨分見苦しき事で日本の歷史上になき大變でありし此等も因緣のある事で一朝一夕の故では無い易經の坤の卦の文言に善を積むの家には必ず餘慶あり不善を積むの家には必ず餘殃あり臣として其君を弑し子として其父を弑せ一朝一夕の故にあらず其由來する所の者漸なりと箇樣な大變の到來することは必ず其因緣があるべき筈である それは兎もあれ源家の上で言へば是までは左

程見苦しき事もなきやうに見にてあるが此變に義朝が親を殺せしより以來は種々な怪事ばかりである義朝の子の惡源太義平と云ふは伯父を殺したゆゑ惡源太と仇名を付けらるゝ其後義朝が清盛と戰ひて敗北し京都を落ち延び關東に下るとて尾州知多郡の長田と云ふ處に家來鎌田政家が妻の家あるを尋ね往き暫く滯留する中政家の舅の長田の莊司忠致が其子と謀りて義朝主從を殺す斯て義朝の子賴朝が伊豆より起りて親の仇とて平家を討亡ぼせ其時に尤も力を盡せしは弟の範賴義經であるが此兩人を兄の賴朝が故もなきに憎みて兩人ともゝ殺す其賴朝の子が二

人あり。賴家、實朝と云ふ。兄の賴家が。鎌倉の二代將軍となる。此の賴家も。其母の尼御前の身元の。北條を憎みて。これを亾ぼさんとして事ならず。遂に已れ伊豆に追遣き。牢に入れられて。恨みに堪にかね。狂氣になりて死す。其弟の實朝が。三代將軍となる。或時、鎌倉の八幡宮に。參詣をる折に。公曉と云ふ小坊主が飛出して。刀を振ふて。實朝の首を打落す。此の小坊主は賴家の子なりしを。尼御前が寺へ遣りて。坊主にせしものである。親の仇として。現在叔父に當る實朝を殺し。已れも。北條の爲に殺さるゝ。是れよて。源家の正統が斷える。此の因緣を。能々考へて見よ。一家、一門が。互に仇となり敵となりて。殺

し盡すじや。隨分、業種と云ふものは。畏きものである。因緣のある所に。何くまでも付き廻る。是れは一家門に。業種が相續した有樣である。家門にさへ相續するからは。自已に作りし業は。固より生々死々に付き廻る道理である。此外箇樣の例證を擧れば。和漢、古今に。其數は知れぬ。凡人は。左程に思はぬ事でも。明眼の者から見ると。一々因緣のある事で。業種が相續して。善惡の果が分明である。歷史などに見るのは。多く王侯貴人などの事のみであるが。それさへ箇樣な事である。況して平常、凡人の。一身、一家、一族の上より云へば。其事は限なかるべし。此等の事を。憶念をると。此の業種の畏るべき

事が知れる。一朝の迷から前後を顧みず。物事を輕慢に取り行ふは。實に畏きことで。凡夫が輕慢にする處に。一家、一族、一國を亡ぼす業種を結ぶである」義朝が親と戰ふ時は。武門の習ひ。親子兄弟も敵となる。致方は無い。と思ふたに相違無い。其親を殺す時は。帝の御意じや。臣として致方がない。と思ふたに相違ない。此輕慢の心より。遂に一家、一族の大難を引起す。世の中の習ひである。致方がないなどゝ云ふて。理非を辨ぜずして。取行ふ事は。謂はゆる漸なりで。畏るべき事である。少し智分のあるものは。考へて見るがよい。此の心境、內外の相を。底を拂ふて見徹すときは。唯是れ一心

である。唯是れ一法である。能所相對して。暫く種々の模樣があれど。固より一法の取るべき相はない。時々に迁流し。念々に轉變して。鏡中の影の如く。水上の波の如し。これを名づけて。一心法界と云ふ。心と云ふも。法といふも。悉く假名なれど。此の假名を立て。此一大事を。開悟するの方便となす。扨この一心法界の上より觀ると。智と識との分際もなく。一切の法。ことゝく在の儘である。此の在の儘の處に。一々智慧が成就してある。明らかなる處は。明らかなる智慧が。成就してある。暗き處は。暗き智慧が成就してある。生ずる處に。生ずる智慧が成就してある。滅する處に。滅する智慧が。成就してある。

自身のある處に。自身の智慧が成就してある。他身のある處に他身の智慧が成就してある。天地、山河、大千世界のある處に。天地、山河、大千世界の智慧が成就してある。分別、是非して。知るのではない。臆測、妄想して。知るのでは無い。其物のある處。其法の生ずる處。其儘智慧である。如實に知るである。眼を擧れば。眼に智慧が成就してある。色と識とを。一度に見透す。耳を欹れば。耳に智慧が成就してある。聲と識とを。一度に見透す。自身を起せば。自身に智慧が成就してある。自身、他身と。一度に見透す。乃至、盡十方法界の一々の相を。一々に見透して。異念なきじや。天地を飜し來りて。一念の中に置き。一念を

飜して。天地の外を包む。鬼神も形を隱す處なく。衆魔も。窺ふ便を得ず。何によりて斯くの如きぞと云へば。早く汝の腮にありて。狗を逐ひ。馬と躍らして。傍若無人じや。此心に相なく。此智に分なし。迷へば識となり。悟れば智となる。且らく方便に。種々薩陀の名相を立て。口業を作るも。一念の悲心。他の奴隸となり來て。塵を拂ひ垢を澣ふて。却て罪科を得るものである。」

然も是の如しとは云へど。口があるから。食はねばならぬ。目があるから。見ねばならぬ。耳があるから。聞かねばならぬ。身體があるから。養生もせねばならぬ。自身も其通り。他身もそ

の通り。人間一般に。其通りとすれば。隨分、難儀な事もあるべし。おれを取り纏めて言へば。つまり欲の世界である。ほしいほしいより外に。子細はない。此のほしいほしいに。ゑをかけたが。愛である。己れを可愛がるである。種々高慢な事も。言へば言はるゝなれど。つまりと云へば。茲に落着をる。見よ。無事な時には。天下の爲とか。國家のためとか言ふものも。澤山なれど。少し自身の上に。病氣でも出來ると。先は天下も國家も取除けじや。七轉八倒して。狂ひ出を。おれを凡夫と云ふ。此の凡夫の心實が。正直な所である。此の正直な處を。忘れさへせねば。おのづと邪見な事もない。人を呪咀へば。穴二つじや。此

の人間世界に。我が身を芥の如く思ひて。傍若無人の振舞をなすものほど。畏しきものは無い。一番大切な我が身を。芥の如く思ふほどなるによりて。其以上に。推して知らるゝ。看よ。船に乘るに。命知らずの船頭に打任せては。心元なきおとである。みづから其身を。大切に思ふものに。おのづと人をも大切に思ふ。物をも大事に思ふ。啻に人と物とを。大切に思ふばかりでは無く。明日の事をも。大切に思ふ。明年の事をも。大切に思ふ。遂に身後の事までも。大切におもふ。一家、一村、一國の事までも。大切に思ふ。みづから大切に思ふ心に相應して。一切の事が。大切に見ゆる。愚痴なものほど。みづから大切な事

を知らぬ。四半分ばかり身命を捨て。他人を押倒し。物事を手荒らく取行ひ。少し才氣のあるものは。英雄、豪傑を氣取り。下品な處では。喧嘩爭論を好み。甚しきは。押込み強盜などをも企つる。其の由來を尋ぬると。悉くみづから輕んじ。自ら愛せぬより起る事である。凡夫持前の心實を失ひて。不正直な心底である」此等のものが。世に生れ出るほど。人間の福分が薄くなり。難儀の上に。難儀が重なる。一番大切な身體を捨てゝ。一寸とした識の轉變から生ずる。金銀、財寶、乃至一朝の快樂を貪るから。箇樣な事になる。百貫の方に。編笠一つを擔いで。途轍もなき方角へ迷ひ込み。果は地獄の滓となる」看よ佛も

其初めは。生老病死を悲みて。遂に家をも身をも捨て。涅槃常樂の地を求め。成佛致されたとである。みづから愛し。自ら重んぜるの心が無ければ。生老病死も。左程に悲むべき事ではない事を好んで。病も作り死にもするものが。何しに生老病死が悲まるゝものぞ。涅槃常樂の地も。一旦の快樂を貪りて。後の世の事を顧みねば。無用の長物である」これによりて知れ。此の凡夫持前の心底が直に大智慧を起す因緣である。人間にありては。人間の德である善と云ふ事も。惡といふ事も。此の人間が。各々みづから愛する所より起る。文王、民を視ること傷の如しである」

此の凡夫の心底を其儘引くり返しさへすれば直に悟りとなる引くり返すとて嫌なものをすき好むでは無い善き事を惡きと思ひなすのでもない此等を其儘にして引くり返すのである譬へば毒を藥とするやうなもので毒の性を其儘にして藥とするのである古の聖人これを知るゆゑに仁義を以て名教を立て禮樂を以て威儀を制し其本を推し其源を尋ぬると悉く凡夫持前の事である見たい聞たい飲たい食たいである男女の欲より生を喜び死を惡むの情にいたるまでこれを其儘にして人間の德を全ふする法である此の欲ありて此の苦あり此の苦ありて此の道德が起る沃土

の民は惰る先王是を以て民を瘠地に誘ふ是故に苦い樂の因である德の原である苦を轉じて樂とするは能く思ひて勤むるからである禍福吉凶此處にある徒らに高遠の事ばかりを妄想して饒舌ばかりが賢いものとは云はれぬ畢竟眞實のある處がどこまでも人間の歸るべき場所である其眞實を眞實として虛妄虛喝な事を取除いて有の儘の道理の在る處に隨順すべきである其の道理の在る處がどこまでも人間の福分の在る所である苦を脫するの法である人と生れし欲があれば其の欲を廣大にして德を成就すべきである誰しも心の癖にあるものなれどこれは此心の病氣

と云ふものである。此身に病氣があれば。一生懸命に保養をする。此心に病氣がありても。取り構はぬは。不覺千萬である。看よ。此の身體の病苦の爲に。狂氣したり。自殺したりするものは。大概は無い。此心の病苦が募ると。發狂もする。自殺もする。人をも殺すやうな事が出來る。箇樣に。此心の病苦は。一入苦しいものに相違ないが。これを保養して。療治するものは。稀な事である。眞實に能く思ひて。これに心が付けば。畢竟此心の癖から生ずることとなれば。直に取除きが出來るものである。夫れも段々大病となると。致方がない。此の人間の。持前の心實を盡して見ると。横道の事はならぬ。横着な事は言は

れぬ。此心へ。明鏡の如きもので。惡き事へ。惡きと知る。知らぬ事は。知らぬと知る。假令聖人賢人を誰かそことは出來ても。此心を誰かす事へならぬ。一分一厘でも。胡亂の無いものである。うれも變な處に。迷ひ込むと。平常の心を失ふにより。隨分とも心底から。不都合な事を仕出そこともある。是れは例の大病の成り果で。通途凡夫の持前とは云はれぬ。此心あれば。必ず此身がある。身と心とは。常に恒に和合して。暫くも離れぬものである。影の形に添ふが如く。響の聲に應そるが如く。無始曠劫より。盡未來際まで。相違はせぬ。一生一死へ無きにあらず。されど此心の生々の處に。必ず此身があ

る。此身あれば。必す此の眼耳鼻舌がある。此の眼耳鼻舌あれば。必ず此の色聲香味がある。此心は。この色聲香味を受納して。妄想を起し。種々に分別して。違順の二境を感ぜるである。此の違順の二境が。どこまでも一切衆生の境界である。違順とは。此の心に背き違ふを。違境と云ふ。此の心に從ひ順ぜるを。順境と云ふ。此の順境に對しては。瞋恚の心が起る。此の違境に對しては。貪欲の心が起る。此の貪欲。此の瞋恚に苦しめられて。愚痴の心が起る。これを意業と云ふ。意業とは。意で作る業といふ事である。此の意業が動いて。言葉に現るゝを。口業と云ふ。身に現るゝを。身業と云ふ。口業とは。口で作る業と

いふ事である。妄語、綺語、兩舌、惡口など云ふ差別がある。身業とは。身で作る業といふ事である。殺生、偷盗、邪婬など云ふ差別がある。此の身口意の三業が。種々、惡業の因となりて。業種子を作ると云ふことである。さるによりて佛が。十善戒を制して。世間出世間の道を立てらるゝ。此の十善戒は。性戒と云て。此心の德として。本來成就してあるによりて。これを破すると。自心で自心の性功德を喪ふて。地獄にも墮ると云ふことである。左程六つかしき戒法ではなけれど。其の事柄は。至て大切な事である。これを破るは。自身に傷を求めて。苦しむと。同じことである。不殺生戒。不偷盗戒。不邪婬戒。不妄語戒。不

綺語戒、不惡口戒、不兩舌戒、不貪欲戒、不瞋恚戒、不邪見戒、これを十善戒と云ふ。箇樣に身口意の三業を差別して。これに一々不の字を加へて。十善戒法とせ。此の戒法が。其儘、人間の世界と云ふことである。譬へて言へは。物に底を入れて。酒なり水なりを。盛るやうなものである。此底が破るゝと。餓鬼、畜生、地獄にも。其儘、墮落せると云ふことである。此の十善戒の事は。十善法語など云ふ書物がある。これに就て見るがよい。至て面白き法である。

此心あれば。此身あるものと決定して。疑ふ心の無きが。大智慧である。此身あれば。一切の法を感覺受納して。違順の二境

が起こる。違順の二境が起ると。身口意の三業が起ると。十善戒法がある。此の戒法は。此心の性功德なりと決定して。疑ふ心の無きが。大智慧である。箇樣に決して見よ。幽靈、怪物、鬼神、上帝、天狗などは居らぬ。假令、一切衆生が。此土を死し去るも。必ず彼の土に生を受けて。此心と此身とは。影の形に生ずるが如く。隨處に從ふものである。身も口も無き心ばかりが。幽冥にぶらづきて居るものではない。看よ。虫蟲でさへ。心があれば。其の形がある。若し幽靈、怪物、鬼神上帝、天狗などへ。心ばかりで。此身を現はす事が出來ぬとなれば。最下等の片輪ものである。虫蟲ほどの働も出來ぬ。冥頑